



----- 支える楽しさ -----
スポーツボランティアの今と明日



市民スポーツボランティア SV2004 (2010年版)

はじめに

< 知って欲しいこと >

人は一生の間に何歩歩くのでしょうか、一生の間にどれほど話すのでしょうか、そして、一生の間に一体どれだけの人に会おうのでしょうか。スポーツのボランティアとして活動していると、歩くこと、話すこと、そして多くの人との出会いには事欠きません。

以前実施したプロバスケットの仙台89ERSのボランティア・アンケートでは、ボランティアへの参加動機のトップは「仲間と活動することが楽しいから」というものでした。冒頭の全ての要素がこの回答には含まれています。しかし、参加する思いはもっと人様々であり、現実の活動は決して華やかなものばかりではありません、その相違のために自ら参加してきたはずの多くのボランティアがいつしか活動を止めていく。そうした姿を見続けてきて、どうしたらその思いを少しでも活動に反映し、楽しいと思える環境を作ることが出来るのか。一過性のものではなく継続的なものとする事が出来るのか、そして何よりスポーツのボランティアの仲間を増やすことができるのか。を考え続けてきました。

このため今回、仙台を中心としてその名の通り2004年から活動している市民スポーツ・ボランティア組織SV2004（エスバイ・ニーマルマルヨン、以下SV）で作成したボランティア・ハンドブックをベースに、これから活動に参加してみたいと考えている方や立ち上げを検討しているスポーツ運営組織のみなさんには、活動の概要と参加の手順、何より楽しむことを伝え、既に活動している方や組織の方々とは共通する点の多い現状の課題と改善の方向性、何よりスポーツのボランティアのこれからの可能性について一緒に考えてみたいと思ったのです。

< 前提条件として >

この本では「スポーツボランティア」を特定の種目やプロスポーツチームのイベントを継続的にサポートする人や組織としてとらえています。このほかに、選手の育成にコーチをはじめ様々な形でかかわる人々や、スポーツの振興にボランティアとして参加している人もいれば、選手やチームなどの関係者が地域への貢献活動のひとつとしてボランティア活動をする場合など、現実にはその活動の領域や形は実にいろいろとあります。

ここでは、まずはボランティア初心者も含め特別な経験や資格などがなくても参加できるものとして、あえてイベントの運営をサポートする「スポーツボランティア」に限定して取り上げていきたいと思えます。

結果としてこのハンドブックが認知が十分とはいえないスポーツボランティアの活動を少しでも多くの方々に知っていただくことにつながれば幸いです。この分野の活動は決まった理想像があるわけではなく、種目により、地域によりさまざまな形があると思えます。けれど、ボランティア活動の基本はやはり「人」であり、「思い」であると考えれば、他の先行する分野のボランティア活動と共通する部分も多々あるはずで、先進事例や他分野にも良いものは学ぶこと、を大切にしながらまずは書き進めてみたいと思えます。

< 目次 >

- ・ はじめに 上記の考え方と動機を説明する
- 1章 はじめてのスポーツボランティア
 - 1 . スポーツとボランティア
 - 2 . 活動に参加する
 - 3 . 楽しさが活動のエネルギー
- 2章 スポーツボランティアの広がり
 - 1 . 課題を減らす、改善する
 - 2 . スポーツをとりまく変化
 - 3 . これからの可能性
- 3章 スポーツボランティアの活動事例 ~ 仲間がいるから
 - 1 . スポーツ施設を身近に ~ グランディ・21ボランティア (宮城)
 - 2 . ホームタウンとともに ~ ジュビロ磐田アシストクラブ (静岡)
 - 3 . 多様なスポーツを支える ~ 広島市スポーツ協会 (広島)
 - 4 . 楽しむことからサポートしたい ~ Alliance2002 (新潟)
 - 5 . 市民で作るボランティア活動 ~ SV2004 (宮城)
 - 6 . 多項目・多地域をカバーするスポーツボランティア NPO 組織
~ うつくしまスポーツルーターズ (福島)
- ・ 終わりに スポーツを通じてまちを変える

1章 はじめてのスポーツボランティア

1. スポーツとボランティア ~ 活動が活発化する背景

(1) 時代の変化とスポーツボランティア活動

<スポーツをとりまく環境が変わった>

従来スポーツの場は「学校」「企業」が中心であり、多くの人々にとっては仕事が終わってからテレビなどを通じてプロレスや相撲、プロ野球などを「見る」ことが中心という時代が長くありました。もちろん、当時でも毎年開催される「国民体育大会」や「インターハイ」、単発で開催された国際的なスポーツ大会などで大勢のボランティアが活動していました。しかし、それはあくまでスポーツイベントをスムーズに運営するための一過性のものであり、イベントが終われば運営組織は解散するのが当たり前だったのです。

そんな状況が大きく変わり始めたのは、スポーツ(イベント)を取り巻く環境の変化でした。ひとつにはスポーツのアスリートにとっての活動の基盤であり、戦後動く広告塔として誕生した実業団チームが、景気の低迷を受けて1991年からの10年間で210も休部や廃部となり、学校卒業後のスポーツ活動の場が失われていったことでした。

一方、学校においても「少子高齢化」の進行に伴い部活動への参加者が減少、その対策として中学の野球や高校のラグビーなどでは学校をこえて行う部活動を認めることとなりました。こうした社会の変化に対応するとともに、健康志向の高まりによりスポーツは「市民」が自らの意思で「する」ものという流れが生まれ、その勢いは年々強いものになっています。この強制ではなく自分が選ぶ「する」スポーツへの流れは次の自らの意思で参加する「ささえる」スポーツへの大きなステップになったと思われます。

ここからの流れについては仮説の域をでるものではありませんが、スポーツボランティアの活動が今ほど全国的に活発になった要因として4つの時代が生んだポイントがあったと考えられます。

<中央から地域へ> ~ 地域密着とホームタウン

「ホームタウン」という言葉も「サポーター」の意味も多くの人が知らなかった時がありました。現在では多くの人が知っている言葉、それを普及させたのは世界的に最も人気のあるスポーツのひとつで多くの国にプロリーグがあるサッカーでした。そのサッカーで日本にプロのJリーグが誕生したのは1993年5月のことでした。

スタート当初10クラブであったリーグはJ2も加えて2010年3月段階で37クラブに増加、既に準加盟申請を行いリーグ入りをめざしているクラブもあり、今後も増え続ける見込みです。それらのクラブは全国各地で特定の市町村をホームタウン(本拠地)としており、地域に根ざしたスポーツ文化の振興をかねて活動しています。

チームの名前から企業名を取り去り、ホームタウンの名前をつけて戦うことや、地域の

自治体や市民との連携を重視するなどJリーグは誕生当時から、地域密着をきわめて重視し市民が観客であるサポーターとしてゲームを盛り上げることや、ボランティアとしてクラブを支える取り組みを推奨してきたのです。合わせて、育成のためのシステムを作ったり、クラブや選手が地域に貢献する「ホームタウン活動」などを通じて、クラブ・チームが町にあることを幸せと感じられるよう、さまざまな取り組みを続けています。

こうしたJリーグの「地域密着」「ホームタウン」の取り組みは好事例として他のスポーツに広がりました。2004年9月に創設の発表があった野球の四国アイランドリーグ、四国の4つの県庁所在地を拠点とするチームは現在は九州のチームも加えて6チームに増え、北陸・上信越にもBCという名前で6チームが参加するリーグが誕生しています。運営理念には「地域密着型球団」として、さまざまな地域との交流に取り組むことが謳われ、その一環として大半の球団がボランティア制度を採用しています。

また、2005年の11月に公式戦をスタートさせたプロバスケットのbjリーグ、発足当初6だったチーム数は2010年度中に16にまで拡大する予定です。結果として従来、スポーツイベントを生で見ることに適わなかった地域にもチームが誕生することで、気軽に観戦を楽しむことが可能になりつつあります。しかし、そうした環境を継続的なものとしていくためには、そこに住む人々とチームの距離が近く、互いを支えあう仕組みは、スポンサーとなりうる大企業が多く、潜在的な観客となる人口も多い大都市圏に比較しより重要なものとなっています。そうした仕組みのひとつが、ダイレクトにチームをサポートするボランティア活動なのです。

< ネット環境の進歩 > ~ 長野オリンピックの経験

現在、スポーツのイベントを企画するチームやクラブは、当然のように自前のホームページを作りさまざまな情報を発信しています。家庭内へのパソコンの普及、更には携帯電話でもホームページの検索や閲覧が可能となり、Eメールのやり取りも活発に行われるなどネット環境の変化は目覚ましいものがあります。その結果、スポーツのボランティアに関する募集や活動・イベントの報告などの情報はスピーディにホームページに掲載され、ボランティア活動においても、参加の確認やイベント・打ち合わせの案内などはメールでボランティアに配信されることが増えています。

そうした情報のやり取りの方法の劇的な変化は1990年代のことであり、前述の通りスポーツが地方に広がりを見せた時期と重なっています。とりわけ、象徴的なスポーツイベントが1998年に長野で開催された冬季オリンピックでした。約3万人が全国各地からボランティアとして集まり、急速に普及していたネット上で情報を交換し、自主的な交流会を行い、そして何よりさまざまなホームページ上に活動記録を残したのです。こうした活動経験を共有し将来に生かそうという取り組みや、同じ目的を持った人々がネットワ

ークを作るという動きは、その後開催されたサッカーのワールドカップのボランティア活動などにつながりました。この大会では全国10都市での開催となったことを受けて、さまざまな市民組織が連携して国外からの観客にさまざまな情報を発信したり、組み合わせの抽選会と連動したイベントをネットで結んで楽しんだり、ネット上で全国各地のボランティアが同じ時間を共有し、地域をこえた連携を作り上げたのです。

スポーツのボランティア募集は、今やほとんどの場合ホームページによって行われていますし、活動に参加するボランティアへの連絡もEメールが積極的に利用されるようになってきました。パソコンに向かい「スポーツ」「ボランティア」で検索をすれば、たくさんの情報を探すことも容易になりました。その情報を知ることが活動へのきっかけになることも確実に増えているのです。

運営する側からみれば、本来多くの方が参加するボランティアの運営では窓口業務も膨大なものとなります、それがパソコンやネット環境の進歩によって改善されたことは、負担軽減に役立つ結果となりスポーツボランティアの活動の拡大に影響しました。

< 市民活動の盛り上がり > ~ NPOの時代

NPO (Non Profit Organization) は「利益を目的としない組織」であり、戦後社会の変化に伴い、行政の対応が遅れていた福祉や環境の分野から広がってきました。やがてその範囲が急激に拡大したことを受けて、1998年「NPO法」が定められたのです。その第1条は「この法律は、特定非営利活動を行う団体に法人格を付与すること等により、ボランティア活動をはじめとする市民が行う自由な社会貢献活動としての特定非営利活動の健全な発展を促進し、もって公益の増進に寄与することを目的とする」と謳っています。

最初は、社会的に制度が遅れている分野や、公害など発生した課題解決のための市民活動という側面が強かったNPO活動は、やがて、祭りや文化など自らが楽しむものにも広がり、その中でも「社会や誰かのために役に立つ」というボランティア活動としての意味合いが近年大きくなっているようです。

スポーツボランティア活動の広がりに対し、こうした「市民意識の変化」が大きな追い風となったことは間違いなく、スポーツを楽しく「支える」ことはまさにNPO活動そのものと考えられます。今後、さまざまなプロスポーツをサポートするボランティア組織の中から、組織として自立するためにNPO法人格を取得したり、総合型スポーツクラブの中にも「NPO法人」をめざしていく動きが増えていくと考えられます。

では、具体的にNPO法が定められたことで、どのような変化があったのでしょうか。仙台市では1999年に市民の公益活動を支援するために「市民活動サポートセンター」を設置しました。そこには市民が無料で打ち合わせをすることが可能なスペースが設けられ、イベントを開催するための部屋、低価格で使える印刷機やコピー機、利用する市民団

体の拠点としても使えるレターケースやロッカーなどのハード的なものから、市民活動に関する相談や助言、さまざまな市民活動団体についても情報の提供やセミナーの開催などのソフト面までが提供されています。平成17年のデータでこのセンターに団体情報を登録している県内の組織は2,796となっていて、登録している活動テーマでは、多い順に「環境」「福祉」「まちづくり」「子ども・教育」「文化・芸術」となっていて、「健康・医療・スポーツ」は6番めで、それでも483団体にものぼっています。

< 身近なスポーツの振興 > ~ スポーツ振興計画の取り組み

スポーツボランティアの活動が活発化した4つめのポイントである「地域スポーツクラブ」の振興は、2000年9月に策定された「スポーツ振興基本計画」によって明確な目標が示され、スポーツを「する」「みる」「ささえる」ことが各地域の人々自身のものであるとされたことに始まります。少子高齢化のながれの中で学校や企業中心のスポーツ活動の限界が見え始め、更に人々の健康や観戦に対する意識が変化してきたことから、「スポーツ振興基本計画」には、生涯スポーツ社会の実現、国際競技力の向上、子供の体力向上のため、2010年までに各市町村に最低1つ以上の総合型スポーツクラブを育成、そのために各都道府県には広域スポーツセンターを設置するよう明記されたのです。

目標年となった現在ほとんどの都道府県に広域スポーツセンターが設置され、総合型スポーツクラブ育成のための指導やサポートが進められています。そして、そのホームページには、愛媛・富山・宮崎・熊本などごく自然に「スポーツボランティア」の募集や登録制度が紹介されています。同時に、急激に増加している「総合型スポーツクラブ」では、多くの人々がボランティアに近い形で活動しているのです。それは、地域のさまざまな年代の住民に対し、多彩な種目のメニューを提供し、その要望にこたえていくためには、コーチや指導者が不足しており、限られた予算の中で運営をしなければならないという、クラブの置かれている厳しい環境が背景にあると考えられます。

この総合型スポーツクラブを核とした社会の変化はようやく動き始めたばかりで、今後、どのように地域のプロスポーツや健康志向の市民の利用率が高まっている民間のスポーツ施設、そして何よりスポーツのボランティア活動と連携していくのか注目されます。

(2) 宮城とスポーツボランティア

< 地域密着のためのボランティア制度 >

宮城県仙台市、このまちとその周辺には現在千名近いスポーツボランティアが継続的に活動しています。本来であれば雪国であり、スポーツが特別に盛んというわけではなかった地域で、何故これほど多くの人々がボランティア活動をしているのか？ それは、宮城のスポーツに関連したボランティア活動の歴史にあると考えられます。

スポーツに関連したボランティア活動といえば、地域のスポーツ少年団や学校などで子供の両親や、先輩が子供たちにルールや技術を教えている姿が浮かびます。ほんの十数年前までは国体など一過性のスポーツイベントをのぞけば、決して数も多くはなく、関わっているのはスポーツの経験者が中心でした。

その光景が一変したのは1993年にサッカーのプロリーグであるJリーグが誕生したことが大きく影響しています。ヨーロッパや南米などのリーグを参考とした日本のプロサッカーリーグでは、ホームタウン制度というものを採用し、地元とのつながり、特に地域の人々との関係を重視しました。野球でいう「ファン」が、サッカーでは「サポーター」と呼ばれ、チーム・クラブを支える人という呼称で表現されるのは、その象徴ともいえます。やがて、各クラブは地域からボランティアを募りゲームの運営に協力してもらうシステムを導入します。その形・活動はさまざまでしたが継続的な組織として着実に拡大し、現在ではほとんどのクラブでボランティアが活動しています。

< 危機感をバネに活動する >

仙台では1994年にJリーグをめざし「ブランメル仙台」が誕生、1998年にボランティア制度がスタートしました。一時のブームが過ぎ、Jの有力クラブの中にも高騰した人件費などに耐え切れず破綻の噂が飛び交った時期であり、実際に1999年横浜フリューゲルスが、天皇杯で優勝を勝ち取ったにも関わらず横浜マリノスに吸収されるという出来事もあり、累積赤字に悩む仙台を応援する人々の間にも強い危機感が生まれていました。この年J2が始まり、チーム名もベガルタ仙台に変わったことを受けて、地域の財産ともいべきチームの存続を願い、多くの人ボランティア活動に参加していったのです。

< ボランティア経験者の増加 >

一方2001年には宮城国体が県内の各市町村で、そして2002年にはサッカーのワールドカップが宮城スタジアムでとスポーツのビックイベントが連続して開催されることとなりました。県外から多くのお客様を迎えるために、国体では約2万人、ワールドカップでは約2千人のボランティアが活動し、スポーツイベントを支えるということの楽しさに目覚めた人も多くいたのです。宮城ではサッカーのボランティアの延長線でワールドカップの盛り上げのために発足した「キックラブ」という市民組織もあり、仙台市内や宮城スタジアムの周辺でワールドカップの認知アップと、機運の醸成(つまり盛り上げ)のための企画を、頻繁に開催しました。この時の企画の立案や実現までの手順、当日の運営とその後のまとめなどは、その後のボランティア活動のいい経験となりました。しかし、国体やワールドカップはあくまで一過性のスポーツイベント、華やかなときはあつという間に過ぎ去ります。

ワールドカップで仙台ではイタリアのキャンプ地となったことや、日本代表が予選リー

グを首位で勝ち抜けて宮城スタジアムで決勝リーグを戦うなどしたことで、スポーツイベントやサッカーに関心の乏しかった人々にまで、スポーツの持つ魅力が伝わりました。

< スポーツ施設の有効活用 >

そして翌2003年、その余韻がまだ残っていた時期に会場となった宮城スタジアムを含むグランディ21に、継続的な活動をする「グランディ・21ボランティア」が誕生しました。現在では施設型のボランティアとして、スポーツイベントの運営をサポートするほか、施設の見学案内や施設周辺の美化をめざし、花壇の手入れなども行っており特に宮城スタジアムで開催されるイベントには無くてはならないものになっています。

< 幅広いスポーツをサポートしたい >

このころ仙台市では、スポーツイベントの開催とそこへのボランティアの参加に力をいれはじめており、ワールドカップを記念して開催されるようになった「仙台カップ国際ユースサッカー大会」や「泉ヶ岳アウトドアフェスティバル」などで公募により参加したボランティアが活動していました。それは、スポーツを「する」「みる」だけでなく、「ささえる」ということの大切さを行政が重視したことや、一方参加する側からは活動する「楽しさ」が広く理解されてきたことが大きかったと思われます。そうした変化を実感し、その結果としてプロサッカーやワールドカップ、国体などのボランティア仲間の有志と一緒に、市民で作る幅広いスポーツをサポートする目的で2004年の9月に立ち上げたのが「SV2004」でした。(以下、SV)

< スポーツイベントの増加 >

今にして思えば偶然とはいえこのタイミングは非常に幸運だったのです。SV発足を待っていたかのようにまずは宮城県ラグビー協会から主催するトップリーグのイベントに対しサポートの依頼がありました。このイベントは事前の打ち合わせから当日の運営、更に事後の反省会までひとつの流れとして経験するという意味で、大変貴重な経験の場となりありがたいイベントでした。

そして、2004年11月、仙台にプロ野球界で50年ぶりとなる「東北楽天ゴールデン・イーグルス」が誕生しました。新球団はその後おどろくべきスピードで翌2005年の開幕に向け準備をすすめるのですが、地域密着をキーワードとした取り組みの中でプロ野球界初となるボランティア制度がスタートすることになりました。この過程とその後の活動については活動事例の報告で詳しく紹介していきます。時を同じくしてプロバスケットボールのチーム(bjリーグの仙台89ERS)が仙台をホームとして発足することとなり、ここでもボランティアの組織化に向けての検討が始まりました。あれから時間が経過し、現在3つのプロスポーツそれぞれの運営するボランティア組織と前述のグランデ

ィ・21ボランティア、そしてSVと継続して活動するボランティア組織は宮城県内では合計5つとなりました。SVはその中、スポーツボランティア全体に関わる「環境・研修・交流」を柱として活動を続けています。

(3) スポーツボランティアに参加する動機

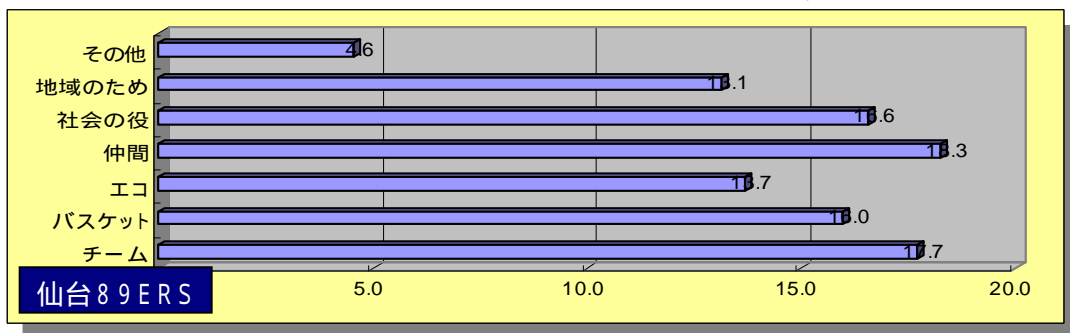
< スポーツを通じて地域のために >

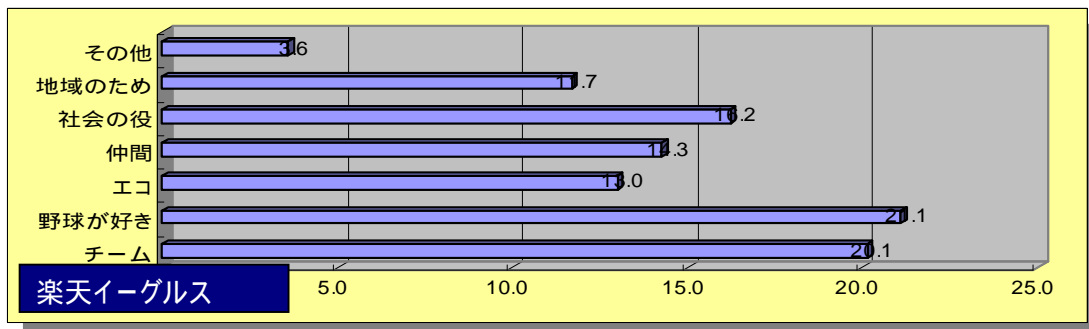
全国各地に、サッカー・バスケットボール・野球などのプロやそれをめざすチームが誕生し、それとともに、そのチームを支えより高いレベルにしたいという人々が増えています。スポーツのボランティアのイメージとして、イベントの会場でもぎりや案内をする姿が思い浮かびますが、一方では、チームの誕生を促すための署名運動や支援組織作りはもちろん、誕生したチームのために、認知を高めるためにチラシをまいたり、ポスターを貼ったりすることもいくつかのボランティア組織では取り組んでいます。その意味では最も大きな参加動機は「スポーツを通じた地域の活性化」であったり、「チームの活動全体をサポートし、日本のトップなり世界のトップをめざす」ということになります。またその背景には「チームは地域の代表」というスポーツチームの多くが採用している「地域密着・ホームタウン制度」が影響していると考えられます。

活動に参加する動機はさまざまです。そしてそのめざすものは活動することで変化もします。チームが好きから、仲間が好き、地域が好きに変わることもあれば、活動の中で環境問題と出会い、イベントで発生する大量のごみの改善に取り組んでいる人もいます。まだまだ活動そのものが認知が乏しく、これが理想というものがみえていない現状ですが、参加することに特別な条件はほとんどありません(一部に年齢制限がある程度)。

< ボランティア・アンケートから見えるもの >

長く活動していると、ボランティアの活動に対する考え方や見方が偏ってしまうのではないかと、多くのボランティア参加者との意識のズレを確認し是正するためにSVではボランティア組織を運営するチームと連携してアンケートを行いました。いくつかの質問の中に「ボランティア活動への参加の動機は」という項目を入れました。< 複数回答可 >





アンケートはプロバスケットボールのbjリーグの「仙台89ERS」と、プロ野球の「東北楽天イーグルス」のボランティアに対して行いましたが、「89ERS」では「仲間と一緒に」の活動が楽しいがトップとなり、次いで「チームが好きだから」「社会の役に立ちたいから」の順となったのに対して、「東北楽天イーグルス」では「野球が好きだから」がトップとなり、次いで「チームが好きだから」「社会の役に立ちたいから」となりました。その背景には野球では男性の割合が極めて高いことや、長年地元で待ち望んだ球団誕生であったことが影響しているものと思われます。

地元で行われるスポーツイベントを通じて、仲間と一緒に楽しく活動したり、チームやそのイベントの成功をサポートする、それは自分のためになり、更にチームはもとより地域や社会のためになる、その充実感が再び自分の生きがいにつながる、参加する動機はひとつだったとしても活動していくなかでそんな変化が生まれてきています。

2. スポーツボランティア活動に参加する

(1) 活動の情報を知る

「ボランティアはやってみたいが情報を知ることが難しかった」。SV2004のイベントに参加してくれた方々から良く聞く言葉です。一方でスポーツのイベント開催時のボランティアの需要は年々確実に拡大しています。つまり、互いの求めるものが一致していながらその情報はうまく伝わっているとはいえない、それが実情ではないでしょうか。

< さまざまな募集方法 >

多くの場合、スポーツのイベントのボランティア募集はプロスポーツであればそれぞれの運営会社のホームページに掲載されます。けれど残念なことにホームページの中でボランティアの項目を大きくわかりやすく取り上げている例はまだまだ少数派、大量に掲載される他の情報に埋もれてせっかくの募集情報に気がつかないケースも多いようです。合わせて、まだパソコンで検索してホームページを見ることができないという市民にとっては、決して届くことの無い情報発信となっています。

その補完の意味で新聞や行政の発行する情報紙などによる募集告知は、必要不可欠なものとなります。2005年、東北楽天イーグルスがプロ野球で初めてボランティア制度を作るために募集活動を行いました。ホームページ、そして地元新聞で募集したのですが締め切りが近づいても目標の半分という状態でした。そこで、再度地元新聞に協力していただき「ボランティアが足りない」という記事を掲載してもらったのです。効果はてき面で、なんと締め切り日までには目標の300人を越える登録がありました。地域密着のチームであれば地元のメディアとの友好関係はもちろん大切です、単純な紹介記事ではなく、内容が重要ということが良くわかる経験でした。

ボランティア活動を希望する人の視点で見れば、まずは日ごろからスポーツのボランティア活動をやっているチームや団体の動きに気を配り、新しいシーズンが始まる前に余裕を持って直接問い合わせてみるのが確実ですが、同時に前述のホームページや地元新聞・行政の情報誌のスポーツ情報欄や、社会欄を注意してみとくと良いでしょう。まったく初めて活動に参加するというのは誰しも気後れするものです、せっかく活動に参加してもなかなか他のメンバーとなじめずに止めてしまう方もいます。一方で、既に活動している友人や知人がいて、口コミで参加することになったケースも意外に多いようです。まずは全てに共通することですが、興味を持ったら一度は観戦して外から活動をみても大切なことです。

(2) ボランティア活動の場

繰り返しになりますが、スポーツのボランティアといえは、子供たちのために技術的な指導をしたり、送迎や食べ物を用意したりするイメージをもっている方が、まだ予想以上に多いようです。それはここで取り上げているスポーツイベント系の運営サポートの活動自体がまだ十分に認知されていないということでもあるのです。

現在継続的に活動している全国各地のスポーツボランティアの活動には、どんなものがあるのでしょうか。ここで代表的なものを紹介します。

プロサッカー J1・J2・JFL及びJリーグ入りを目指しているクラブ

ホームタウン制度を採用し、地域とのつながりを重視し多くのクラブがボランティア組織を作っています。また、社会人リーグのチームでもJリーグをめざすチームではボランティア制度を立ち上げているところが多いようです。

プロ野球 楽天イーグルス・日本ハムファイターズ・独立リーグ

仙台の楽天イーグルスが2005年にボランティア制度を創設し、少しずつ増加しています。広島では球団ではなくスポーツ協会がボランティアを派遣しています。また、四国や北信越に誕生した独立リーグの球団の多くにもボランティアが活動しています。

プロバスケットボール bjリーグ

2005年にスタートしたbjリーグ、ここでも地域密着がテーマとして掲げられ、その手法のひとつとして多くのチームでボランティアが活動しています。

スタジアムボランティア

2002年に全国10都市で開催されたサッカーワールドカップ、その際に会場となったスタジアムの中には、施設を拠点としてボランティアが活動しているところがあります。その特色は、特定の種目だけのサポートではなく、施設を使用して開催されるさまざまなイベントをサポートする点です。事例としては「横浜国際競技場」「さいたまスタジアム」「宮城スタジアム」「神戸ウイングスタジアム」「エコパ」などがあげられます。

単発スポーツイベント

サッカーやマラソン・駅伝をはじめ規模の大きいスポーツのイベントではその都度ボランティアを募集することがあります。東京マラソンなどのように公式のホームページなどを通じて全国的に募集することもあれば、そのスポーツに関連する組織によって公開ではなく募集する場合があります。

国体ボランティア

全国持ち回りで開催される国体では、事前の段階から国体終了あとの障害者スポーツ

大会まで、多くのボランティアが活動します。県や各市町村まで規模にあわせて募集されます。

広域スポーツセンター

各県に設置が進んでいる「広域スポーツセンター」、その活動の一環としてスポーツボランティアを組織したり、登録制度に取り組んでいる場合があります。この場合はイベントだけではなく、さまざまなスポーツの指導者まで広く募集するケースが多いようです。

スペシャルオリンピックス・日本

1968年にアメリカで組織化され全世界に広がった知的発達障害のある人々にさまざまなスポーツトレーニングの場とその発表のための競技会を提供している組織です。ボランティアは日常的なトレーニングや、イベント・事務局など幅広く活躍しています。

代表的なスポーツのイベントサポートを中心としたボランティアを紹介していますが、それ以外にも現在全国各地で誕生している「総合型スポーツクラブ」や「地域のスポーツ団体」などでも、指導者や活動を支援してくれるボランティアを募集しています。まずは気軽に確認してみてください。

(3) 申込から活動までの流れ

< 申込み >

情報を確認し、応募する決意がいたら応募用紙を入手します。インターネットの進歩によって最近では募集をしている組織・団体のホームページからダウンロードできるケースが増えています。それが無理な場合は問い合わせ先に電話をすると、郵送などで送ってもらえます。大半のボランティア募集では応募の条件は年齢のみで、多いのは高校生以上か、18歳以上で未成年の場合は保護者の同意が必要となっています。また、きわめて少数ですが、年間（もしくはシーズン中）の活動回数を 回以上と決めている場合もあります。これは、特にプロスポーツのボランティアに多く、シーズン終了後に多くのチームで実施しているボランティアと選手との交流会だけを目的に活動しないで登録だけする人を排除するためのようです。

(注意) 国際大会などのイベントでは、最初から活動内容ごとに募集する場合があります。この場合には、年齢制限だけでなく語学力やさまざまな専門知識が求められるケースもありますので、ぜひ募集要項をしっかりと確認しましょう。

さて、応募用紙に必要事項を記入したら郵送やFAXなど（ごくまれにメールやホーム

ページから可能という場合もあります)で申し込むことになります。多くの場合募集には期限が決められていますので、特に郵送の場合は届くまでの日数を考慮し余裕をもって申込みたいものです。

< 説明会に参加 >

応募が受け付けられると次に「ボランティア説明会」や「研修会」に参加します。継続的に活動している組織の場合には、一般的にはイベントで使用するスポーツ施設で、新人と継続に分けて開催しているところが多いようです。初めて参加する人には「チームやボランティアの歴史・活動の目的や内容・さまざまな注意事項など」の説明があり、ボランティアのユニフォームや備品の貸与、施設の見学などを実施する場合があります。一方、継続的に活動しているボランティアについては、前年との相違点の説明やより実務的な研修が実施されます。

多くの場合、当日配布される資料には年間の活動スケジュールが入っています。なかなか長期のスケジュールを予測することは大変ですが、可能な範囲で活動日を記入し申し込みましょう。また、不明な点については、ぜひきちんと確認したいものです。

説明会や研修は大会やイベントの規模によって、複数回開催される場合もあります。しっかり予定を確認しておきたいものです。ボランティアに応募する人には実にさまざまな方がいます。より多くの方が参加できるようプロバケットボールの仙台 89ERS では、平日の夜と日曜の昼などに同一の説明会を開催するなど工夫しています。万が一参加できない場合でもボランティアをあきらめるのではなく、ぜひ、主催者に問い合わせしてみてください。

< 活動 > 下線については補足説明があります

説明会が終わり、活動日が決まればあとはその日を待つばかりです。ここでは、初めて参加する A さんの一日という設定で、活動時に注意すべきポイントについて説明します。

A さんは地元のサッカーチームがボランティアを募集していることを知り、今年から参加することにしました、今日はその最初の活動日です。試合開始は午後 2 時で、観客の入場開始は丁度正午、そのため 11 時にスタジアムに集まるように連絡がありました。一週間前の説明会で受け取ったボランティアのジャンパーに帽子、ID カードとウェストポーチを準備⁽¹⁾し、少し寒かったので暖かめのセーターを着て余裕をもってバスで自宅をでます。⁽²⁾どんな活動が待っているのか、期待もあれば不安もあります。

会場のスタジアム周辺は、既にチームのレプリカを着たサポーターが歩いていたりチームのフラッグが掲示されていたり、ゲーム当日の熱気を感じます。入り口への続く通路を警備員にIDカードを見せて通過、スタジアムの関係者専用の入り口から中に入りました。⁽³⁾入り口はさすがにメディアの関係者や今日のイベントの関係者などでにぎやか、Aさんは元気良く挨拶を交わし⁽⁴⁾ながらボランティア控え室⁽⁵⁾に向かいました。

ボランティア控え室では、最初に受付をしました。⁽⁶⁾ここで、当日の配置や活動内容⁽⁷⁾がわかります。合わせて、掲示板を見ること⁽⁸⁾や11時から説明があるということを伝えられました。一枚の紙⁽⁹⁾も渡されましたが、そこには今日の時間帯ごとのスケジュールや、イベントの内容（入り口での配布物の内容も含む）が書かれており、裏面には活動ごとのメンバー表がありました。Aさんは、まず持ってきたジャンパーを着て貴重品やメモ帳・軍手などをウェストポートに⁽¹⁰⁾移し、身につけてから掲示板を見ることにしました。ボランティア情報ボードと書かれた大きなホワイトボードには、いろいろな情報が掲示されています。まずはチームからの情報ということで、全員に気をつけてほしいマナーや注意、今後の活動予定、その中でもボランティア数が不足している日程などがありました。ボランティア事務局からは、ボランティア同士の交流企画⁽¹¹⁾として「お花見」の開催について、来月の近くのチームのアウェー戦での「応援研修参加者募集」の情報⁽¹²⁾があります。最期に、ボランティアアンケート箱⁽¹³⁾があり、帰りにお客様からの要望・質問など気づいたことを書いて入れてくださいますとかかれてありました。Aさんは必要なものを自分のメモ帳に書き込み、まずはお花見に参加してみようかと思っていました。

定刻11時になり、まずはチームの担当から挨拶があり、ボランティアのリーダーからさきほど手渡されたペーパーをもとに、簡単な確認と注意事項の説明⁽¹⁴⁾がありました。観客予想や天候の見込み、サイン会などお客様からの強い合わせが多いと思われ、全員が知っていたほうが良いと考えられることはここで説明しているそうです。簡単な説明が終わるといよいよ活動場所に移動します。今日のAさんはゲートのチケットチェック、約10名ほどのメンバーが指定された場所に集まると、リーダーから担当する業務についての説明が始まります。今年最初の活動ということで初めての参加者も何名がいるため、ベテランと組み合わせ配置すること、Aさんと同じ担当はBさんになりました。休憩の取り方やチケットの種類、わからないこと⁽¹⁵⁾は、自分では対応せずに近くのリーダーやチーム関係者に任せるようにとのことでした。

説明のあと、まだ開場まで時間があつたのでベテランのBさんにゲートの周辺を案内してもらいました。良く聞かれるのは、トイレ・喫煙所・売店の場所と、席に関することだといひます。たまに聞かれるが覚えておいたほうが良いのは、公衆電話・授乳室・救護室

などで、迷子や落し物などは総合案内に誘導しているそうです。多くは慣れてしまえば答えることは困らないそうですが、イベントについては毎回かわるので、念のため確認しておいた方が安心ですと教えられました。何より、質問が多くあるということはお客様からわかりにくいということ、多い質問はアンケートにして投稿すると、掲示物などの改善につながるそうです。そういえば、ボランティアはお客様からみて最も身近なスタッフ、お客様の声をチームに届けること(16)も大切な活動だと思いました。

場内放送が流れいよいよお客様が入ってきます。最初のうちに入ってくる人は特に熱心なサポーターが多く、どうしても駆け足になるため注意が必要です。ゲートは入り口と出口に分けているため、まずは入り口でチケットのチェックを行います。中には文字が小さいものもあって結構大変です。大半はチケットホルダーなどを持っており確認は難しくありませんが、中には、一度出て再入場する際に席に忘れてきたり、何度もみせるのは面倒だとなぐる人もいたりして笑顔を維持するのもなかなかつらいものです。Bさんに励まされながら確認をしているとあっという間にキックオフでゲームが始まりました。

隣のゲートのCさんとやっと思食です。控え室に行ってボランティア係りの人に弁当と飲み物をもらい、久々にイスに座りました。Cさんを見るとごみをださないため、ということでマイカップとマイはし(17)を持ってきています。備え付けのテレビでゲームをみながら食事し、Cさんともいろいろ話しました。もう活動を始めて8年になるということで、ここに来ることでたくさんの仲間も出来、年に数回はその仲間と観光を兼ねてチームのアウェーでのゲームを応援に行くのが楽しいと言っていました。ホームでの活動ではゲームをみることは出来ないの、アウェーでは大きな声を出して応援するそうです。食べ終わると、きちんと分別し持ち場に戻りました。

ハーフタイムになると、たくさんの観客がトイレや売店に向かいます。初めての人もいるようで、何度かトイレの場所は質問されました。やがてゲームの後半がスタートしBさんが食事へ、人数が少ないのでこうして交代で休憩を(18)とるようです。Aさんの場所からはゲームは見えませんが、観客の声で攻めているのか、攻められているのかわかります。しばらく応援の声がとぎれたと思ったら悲鳴が聞こえ、どうやら先にゴールを決められたようです。やがてBさんが戻り、ゲートの表示物やポールなどを撤去し、お客様が帰る準備をしていると、大きなアナウンスの声がゴールを告げました。同点、応援の声が更に大きくなっています。残り時間が少なくなってきたのでごみの分別の場所に移動し待機、ゲーム終了後は、帰るお客様に一生懸命に分別を呼びかけ(19)ました。その後、観客の姿が少なくなるとリーダーからの指示でスタンド内のごみを拾いました。最期はボランティア控え室に戻り(20)、チームの関係者からお礼の挨拶があり、交通費などをもらって(21)

最初の活動を終わりました。時間は17時近く親しくなったボランティアさんからはこれでも短い方ですよと教えられました。さすがに立っている仕事で疲れまし、引き分けということで少し残念でしたが、帰りに観客から言われた「ご苦労様」の一言⁽²²⁾が心に残りました。

<補足説明> あくまで基本的なケースを紹介しています。イベントや運営する主催者によって変わる場合がありますので、不明な点は必ず確認するようにしましょう。

(1)・(10) ボランティアの備品

チームやイベントに関するスタッフであることを明確にし、意識の統一をはかるなどの目的として、スポーツのイベントのボランティアにはユニフォームが貸与されます。多くはTシャツやジャンパー、夏場はポロシャツなどでそのままイベント終了時にプレゼントされる場合と、回収・クリーニングし次に利用される場合があります。

ユニフォームは見苦しくないようにきちんと着用しましょう。

(履物や服装については主催者の決めたルールを確認してください)

シーズン中は自己管理、いつも洗濯きれいに使用しましょう。

この他に、多くの場合会場の出入りに必要なID(ADというところもあります)カードが渡されます。

IDは活動時には常に身につけましょう。

その他の備品(あれば便利ですが貸与・支給されるものではありません)

ウェストポーチ・メモ帳・筆記具・軍手・バンドエイドなど

貴重品の管理は自己責任です。控え室に私物を置くことができても、その管理責任はボランティアそれぞれになります。

(2)・(21) 交通手段

多くの場合スポーツイベントの会場までの交通手段は公共交通機関で自己負担となります。ただし、自家用車の利用を認める場合(事前に駐車券などを配布)や、一定の公共交通機関の利用料金または、カードを配布する場合があります。

地球温暖化防止のため、出来る限り公共交通機関を利用しましょう。

(3) 出入り口

初心者が良く迷うのが出入り口です。特に会場の規模が大きい場合には間違えると大変です。説明会や見学会の段階でしっかり確認し、あわせて、どのように入場するのかについても確認しておくようにしましょう。通る場合にはIDカードをしっかりと見せて挨拶をしましょう。

(4)・(22) 挨拶

ボランティアの役割として期待されているものとして大きいのは、義務的ではない丁寧な接客です。自ら希望しチームやイベントのサポートを強く意識して参加しているボランティアは、観客

やお客様の目線に近いこともあり、丁寧で親切な対応が可能です。そのためにはまず仲間同士や関係者とのコミュニケーションから良くしたいものです。挨拶はその第一歩と考えまずは実行しましょう。

観客をあたたくもてなすため4つの要素を大切にしたいものです。

「身だしなみ」「言葉遣い」「活動態度」「知識」

また、ボランティアの活動内容はいろいろです。出来る限り一緒に終わることができるように、自分たちの活動が終わったら遅れている業務のサポートをするようにしましょう。先に帰る場合でも「お疲れ様でした」や「お先に失礼します」の挨拶が大切になります。

(5) ボランティア控え室

ボランティアの活動時の集合や説明、食事や休憩などは多くの場合このボランティア控え室で行われます。ただし、イベントや会場によっては部屋になっていない場合もあります。最近控え室の環境を良いものにするために取り組む組織も増え、自由に飲める飲み物やテレビを設置し、交流のための掲示板などを置くところがあります。不特定多数の人が利用する場所ですのでルールを守って気持ちよく利用したいものです。

(6) 受付

活動は特に最初と最期が大切です。急な欠席は周りの共に活動する人の迷惑になるため出来る限り余裕をもって連絡したいものです。受け付けでは多くの場合当日の資料や活動に関する連絡事項などを確認することが出来ます。

(7) 活動内容と配置

まず単発型のイベントなどでは、活動内容や配置を事前に決定しボランティアにも伝えるケースが多く、事前の研修などでもその活動に即した内容で行われます。

一定の期間内に複数回開催される継続型の活動では、配置・活動内容を固定する方法と、日によって変動する場合があります。ただし、変動の場合でもリーダーについては固定しているところが大半です。

活動を希望するボランティアの数が常に必要人数を越えているのであれば、しかもその顔ぶれがある程度一定であれば、固定化は活動の効率を高めることにつながります。けれど、実際にはボランティアが少なく、毎回顔ぶれも変ることが普通です。そのため、人数を確定させてからバランスを考えて配置することになるため活動内容が変動することを理解し協力しましょう。

(8)・(9)・(13)・(14)・(16) コミュニケーション

活動時に大切なことのひとつに正しく必要な情報を伝える、ということがあります。主催者からボランティアへ、ボランティアから主催者へ、ボランティア同士のコミュニケーションはイベントの運営をスムーズにするとともに、ボランティアの活動意欲にも大きく影響します。

主催者からボランティアへ

ポイントを明確にした説明は最も有効です。けれど人数が多くなるとその効果は大きく減少します。したがってリーダーミーティングを一般ボランティアとは別に実施し、一般のボランティア

にはリーダーから業務・配置ごとに説明する手法が拡大しています。基本的には同じボランティアですから、気軽にただし節度を持ってコミュニケーションをとりたいものです。

使われる道具 掲示板・連絡メモ・トランシーバー・説明会など

コミュニケーションの主な内容

当日のイベント情報・観客や天候の予測・運営の変更点・注意禁止事項

配置・今後の予定や募集について・感謝・その他

ボランティアから主催者へ

活動中に何か連絡や確認の必要がある場合には、リーダーを通じて主催者に連絡

することが一般的です。事件・事故はもとよりわからない質問や苦情がそれにあたります。主催者とボランティアの間にイベント会社や警備会社のスタッフが組織的に加わる場合は、このスタッフに連絡することになります。事前にしっかりと確認し活動時に困らないようにしましょう。

使われる道具 トランシーバー・アンケート・連絡メモなど

コミュニケーションの主な内容

お客様からの質問・苦情・提案・活動予定(欠席・参加・変更など)

ボランティア同士

楽しく活動するためには一緒に活動するボランティア同士のコミュニケーションが何より大切になります。どんなことがあっても気持ちを前向きにする会話を大事にしたいものです。ただし、活動時は観客への対応を優先しボランティアの控え室など場所を選ぶことが大切です。

使われる道具 親睦交流企画

コミュニケーションの主な内容

活動に関する情報交換・レベルアップや交流に関する意見交換など

(11) 交流企画

必ずということではありませんが、特に継続的に活動しているボランティア組織では、多くの場合運営者やボランティアの有志などが中心となって開催される交流企画があります。「お花見」「ボランティアの集い」「フットサル大会」など普段は話すことも少ない選手や、チームのスタッフも参加し楽しい時間を過ごします。こうした企画はボランティア同士の親睦はもちろん、運営者からの感謝の気持ちを伝え、継続への意識を高めることがねらいです。ぜひ気軽に参加しましょう。

(12) 応援研修

サッカーを中心としてボランティア活動の体験や、交流を目的として自分たちのチームが対戦する相手の施設を訪問する企画です。あくまで自己負担の場合とボランティア活動を運営する側が経費を負担する場合と様々です。また、継続的な活動をする組織では、「接客」「救命」などテーマに基づく研修会を開催しているところもあります。

(15) わからないこと ~ 質問

ボランティアの活動の中で観客からの質問に答えることが多くあります。視点を変えれば「質問の多い項目は改善が必要な項目」と考えられます。ぜひ、ボランティアを通じての情報収集には前向きに取り組みたいものです。

図 (ボランティアからよくある質問例)

座席	自由席・指定席など座席の種類と場所に関する質問は特にシーズンの開始時期には最も多くなります。あらかじめ場内の案内図を場内の目立つ場所に掲示するとともに、ボランティアにもコピーを配布し、間違いのない案内をしたいものです。
施設	質問が多いのは「売店」「喫煙所」「トイレ」です。他にも「障害者用トイレ」「おむつ換えや授乳の場所」「医務室」「公衆電話」「総合受付」「ごみ箱」などの質問もありますので、出来る限り場内の案内図に記載するようにしたいものです。また、まだ慣れないボランティアに対しては場内を事前に確認する時間を設けることも大切です。 売店で販売している商品の内容も事前に確認したいものです。
落し物	一般的には「総合受付」にて管理することが多くなっています。問い合わせのお客様を案内するとともに、落し物を拾った場合はすみやかに、場所を確認の上決められた場所に届けましょう。
迷子	迷子をみつけたらまずは落ち着いて名前を確認し周辺を確認しましょう。幼児などでは子どもを落ち着かせて指定の場所に連れて行きましょう。
イベント	近年のスポーツ・イベントではメインのスポーツ・イベントにほかに、さまざまなイベントを行う場合があります。プレゼント企画・抽選会・ミニコンサート・物販・ミニゲームなど内容は多岐にわたりますが、観客から時間や人数、引き換えの場所や内容などについての質問が大変多くなっています。これらはきちんとまとめてボランティアに説明しておく必要があります。
禁止事項	飲食や喫煙、持ち込みなど会場・イベントごとに決められている禁止事項や観戦ルールは、ボランティアの業務と密接に関わっている場合もあります。わかりやすくまとめてポイントをボランティアにも伝えましょう。
近隣施設	会場によって異なりますが、スポーツのイベントの会場の近隣施設について質問される場合があります。ATM・コンビニなどは場内に無い場合が多いので特に一番近くの施設を確認しておくといいでしょう。
交通手段	会場にこられた観客が帰る場合、バスや最寄の電車の駅や発車時間などについて質問されることがあります。念のため総合案内などに時刻表を用意したいものです。
避難経路	お客様から問い合わせをうけることはありませんが、ボランティアとしては活動場所の近くの避難経路は確認しておきたい項目です。

「質問」に的確に対応するために連絡体制を明確にしましょう。

質問や要望の全てに対しボランティアが対応することは困難です、その場合のために運営側の責任者を明確にするとともに、連絡できる手段を明確にしておきましょう。

会場が広い場合はトランシーバーを活用するケースが多くありますが、障害物や距離などでつながらない

こともあるため、互いの携帯番号も確認しておくとう便利です。

わからない質問などについては絶対に自分の判断で答えることはしないようにしましょう。

「申し訳ありませんがわかりませんので、確認させていただきます」と言って責任者に問い合わせることや
 「申し訳ありませんがわかりませんので、総合案内書に問い合わせただけいただけますか」と言って案内所を
 教えることも立派な答えのひとつです。

(17)・(19) エコ活動

多くの観客が集まるスポーツイベントは、さまざまなメッセージのアピールの場として最適です。
 また、観客が増えれば観戦者が出すごみの量も増加し、ボランティアがその処理に関わっている
 場合には活動時間が長くなるケースもあります。そして何より地球や地域のためにチーム・マイ
 ナス6%との連動をはじめエコ活動と連動するスポーツイベントが増えているのです。

その中で観客だけに分別やごみの減量を呼びかけるのではなく、ボランティアも積極的に取り組
 むという姿勢のひとつが、ボランティア控え室などで使用するカップを「マイカップ」(洗えば
 繰り返し使用できるカップ)や「マイはし」(自分専用のはしを持参し割り箸などをつかわない)
 です。あわせて活動時に食べるお弁当も可能な限り分別することも必要です。

(18) 休憩

活動時の休憩はイベントによってさまざまですが、一般的には食事休憩とまったくの休憩がある
 ようです。いずれの場合も同じポジションの人と連動して交代したり、交代の人がくる場合には
 来た段階で休むこととなります。あらかじめ時間や場所を確認しておき、他の人の迷惑になら
 ないようにしたいものです。また、休憩時間はボランティア同士が情報や意見を交換する貴重な時
 間です、一緒になった仲間と気軽に話し有効に活用しましょう。

(20) 解散 ~ 活動の終了

通常ボランティア活動の終了にはふたつの段階があり、ひとつは自分たちのポジションごとの
 活動終了で、特別な理由がなく遅れている人がいないことを確認し、活動中にあったお客様から
 の意見や質問をリーダーに伝えることが大事です。ふたつめの終了はボランティア控え室などに
 戻り、次の活動に向けての情報や連絡を確認したり、主催者からの挨拶などを受けて解散するこ
 とになります。ごくまれに誰も知らない内に先に帰ってしまう人などがいて、他のボランティア
 の迷惑になっています(戻らないと活動が終わっていないのではということで探したりする場合
 があります)。ルールを守って活動したいものです。

3. 楽しさが活動のエネルギー

(1) 応援する気持ち～支える喜びと楽しさ

スポーツのボランティア活動を長く続けていると、多くの人と出会いそして話しをします。それは同じボランティア仲間のことであれば、行政やメディア・卒論を書いている学生もいますし、スポーツについて研究している大学関係者も増えています。そこで必ず質問されるのは、「何故この活動をやっているのですか。」というものです。ほとんど無償で多くの時間を費やしスポーツのイベントを支えること、その理由を完全に理解していただくのは正直難しいことです。何故ならベースにあるのは「楽しい」ということですが、活動している中でその「楽しさ」を感じる対象が刻々と変化しました人によって違うのですから。

< 「勝利が報酬」の裏にあるもの >

各地のボランティア組織の方々と話していて、チームの成績が落ちたら参加するボランティアが減ってしまった。という声を聞くことがあります。これは観客数も同じですが、チームを応援したいから活動に参加する、活動の一番の報酬はチームの勝利という人も多いのも現実です。

2008年3月30日(日) この日宮城県塩釜市の体育館ではプロバスケットボールbjリーグの仙台89ERSと新潟アルビレックスの試合が行われていました。新潟は東カンファレンスの2位を目指し、一方の仙台はこのゲームで勝てば東カンファレンスの1位を決める大事な試合で、まさに一進一退の内容でした。最終の第4クォーター残り10秒、仙台は78-79で一点のビハインド、誰もがわずかな奇跡を信じて両手を合わせ最期となるはずの仙台の攻撃を見守りました。そして、残り2秒、シュートが決まり逆転に成功するのです。その残り時間のなんと長く感じられたことか、新潟のシュートがリングにはじかれた瞬間、会場の大半の人が立ち上がり、ある人は手を上げ、ある人は隣の人と抱き合い、ある人は仲間と握手を交わしていました。そこではボランティアも、観客もチームの関係者もひとつでした。もちろん、このような劇的な瞬間に誰もが立ち会えるというものではありません。けれど、時として訪れるこのドラマのような瞬間のために、長く時として苦しい活動している、そんな気もするのです。

ボランティアの控え室では、良くこんな会話が聞かれます。「私がボランティアに参加すると必ず勝つんだよね」「そうそう、私だって一試合しか負けてないのよ」、もちろん黙って勝った試合数と負けた試合数を数えている人もいるでしょうが、ボランティアの願いはやはりホームチームの勝利なのでしょう。それは視点を変えれば「チームが強くなるために応援する」「チームがそこにあり続けるためにサポートする」ということにも間違いなくつながっているはずだと思うのです。

< ささやかなふれあいと感謝 >

活動シーズンが終わると、多くの組織で「ボランティア感謝祭」などの企画が開催されます。この日ばかりは、チームの関係者や場合によっては選手も参加し、シーズンを振り返ったり、サインや写真撮影をしたり、飲食を楽しんだりします。(内容は運営組織によって違います) また、活動への参加回数が多かったボランティアを表彰するなど、様々なプレゼント企画を行うところもあります。どのように、ボランティアのやる気を維持するかという視点から、これ以外にも多くの取り組みがあり、それを楽しみにしているボランティアも多いようです。

スポーツのボランティア組織が増加し、交流が活発化するにつれて定期的に「研修ツアー」を行なうところが増えてきました。ボランティア活動を運営する組織がバスをチャーターし、他の地域のボランティア活動の体験のためにツアーを企画、ゆっくりゲームを観戦することも含めて楽しむのです。また、ゲームごとに活動終了時に、運営組織の代表者や選手の代表がお礼のメッセージを伝えることを大切にしている組織もあります。大切なのはいかに、ボランティアをそしてその活動の価値を正しく認めていくか、その姿勢は内容はともかく粘り強く継続してほしいものです。

< 出来ることで >

地元にあるチームを応援しサポートする方法は、実にさまざまです。最もダイレクトな支援は、会場に足を運び応援することであり、協賛金や寄付金という形で支援することかもしれませんが、ゲーム当日のボランティア以外にもシーズンの前や途中でチームのポスターを地域の商店などに掲示していただけるように依頼して歩いたり、ゲームの当日には必ず家や店の入り口にチームのフラッグを飾るといった応援や支援の方法もあります。

サッカーJリーグのチームの地元でも、草津や水戸では地元の企業や商店が選手を雇用し生活を守るといった形で支援しているケースもあり、クラブと連携し選手の食事や散髪などを無料もしくは格安で引き受けているケースもあるといいます。ある意味では、こうした取り組みではクラブ・チームと地域との距離はきわめて近く、応援することで得られる喜びもその分大きいのではないのでしょうか。となるとボランティア(精神)のスタートは「出来ることから」といえそうです。あわせてこれらのことから、スタジアムでチームを支えるボランティアは決して特別なものではないということをぜひ知ってほしいのです。

(2) 仲間との交流 ~ 人とのコミュニケーションが楽しい

< ファンとボランティアは紙一重 >

スポーツのボランティア活動に参加するとゲームの都度たくさんの観客をお迎えします。

イタリアのセリエ A では何世代にもわたって特定のクラブの指定席を購入し続けることで近くのなじみの家族との交流が生まれ日本でもそんな光景が増えてきているといいますが、ボランティア活動を継続していても自然に観客にも顔なじみが増えて、そこがある種の社交の場となります。ボランティア同士や観客とのふれあい、その楽しさは共通の目的があるだけに格別です。

また、ボランティアを続けることでチームがより好きになり、親しい仲間とアウェーのゲームの応援に出かけるようになった人々がいます。その意味では地域との接点、地域からのサポートという視点でボランティアの活動の意義は大きいと考えられます。したがって「ファンクラブ」や「後援会組織」の登録者数には厳しく目を向けながら、よりチームに近く、より熱心にサポートしてくれるボランティアの登録者数には全く関心をはらわない、ということは本来あってはならないことだと思います。

< 次の楽しみ >

ボランティアの活動の中では「会話」し「協力」し合うことが重要です。活動は一人ではできないものがほとんどでその助け合いは「感謝の気持ち」を生み、互いを「認める」ことにつながります。たとえば、同じポジションでは時間があれば休憩や食事について話し合っ調整することでしょう。先に行く場合は「お先に失礼します」。戻れば「ありがとう」。という会話が生まれます。わからないこともお互いに質問し短い時間を支えあうのです。その会話の中で互いの趣味を知り、そこに興味を感じれば一緒に何かをしようということになります。前述の「応援旅行」もそのひとつですし、シニアのボランティア同士でゲーム・イベントの日以外に「ゴルフ」に出かけたり、「踊り」のグループを作ったり、様々な活動に発展しているケースもみられます。最初から自分の趣味仲間を増やそう、という目的で参加するのは感心できませんが、活動していく中で互いを理解しボランティア活動以外のテーマで時間を共有する、それは特に会社勤めや家事で長い間閉ざされた空間でのみ生きてきた人にとって、新鮮な仲間作りのきっかけになっているようです。

< 広がる世界 >

急速に広がるスポーツボランティアの活動の場、そこでボランティアが担当する活動内容はかなりの多くの共通性があります。特にプロチームのゲーム運営であればゲート周りや案内、そしてエコ活動が中心となっています。そのために、初めてあった地域やチームが違うボランティア同士であっても、経験や課題について話し合うことができるのです。

1993年に誕生したJリーグでは、既に紹介したように大半のチームでボランティアが活動しています。そのボランティアは年1回全国のJリーグクラブをサポートする組織が持ち回りで開催しさまざまなテーマについて意見交換を行う「全国ホームタウンサミッ

ト」や、リーグのオールスターゲームの開催地で実施される「オールスターボランティア」という、全国のJリーグチームのボランティアが集まりオールスターゲームのサポートと交流を目的としたイベントを通じて、面識を持ち情報交換を行っています。さらに、次のステップとして互いの対戦ゲームなどで体験ボランティアとして相手のホームスタジアムでボランティア活動に参加し、その良いところを学び自分たちの活動に活かそうとする交流も活発化しています。

その後誕生したプロスポーツのボランティア組織では、残念ながらまだサッカーのような交流は多くはありません。しかし、今後活動する人々が成長していく過程において積極的にネットワークを作る動きが出てくると予測されます。地域内のボランティア組織同士はもちろん、全国のボランティア組織との交流と連携、それが更に次のステージにつながっていくはずです。

(3) テーマを持って ~ 活動が進歩する楽しさ

< 目標を共有する >

どんなスポーツイベント、スポーツのリーグやチームにも役割や目標があります。たとえばサッカーのJリーグでは、その理念を3つにまとめています。

「日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進」

「豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与」

「国際社会における交流及び神前への貢献」

このリーグの理念のもとに、そこに所属する各クラブもまた、より明確な活動理念をまとめています。ここでは、浦和レッズの例を紹介します。

「浦和レッドダイヤモンズは、社会の一員として青少年の健全な発育に寄与します。」

「浦和レッドダイヤモンズは、地域社会に健全なレクリエーションの場を提供します。」

「浦和レッドダイヤモンズは、さいたまから世界に向けて開かれた窓となります。」

浦和の場合ボランティアは「スチュワード」という名称で呼ばれ、後援会が運営していますが、その活動の背景にある理念はリーグやクラブと共通しているのです。また、イベントやチームによっては更に「ごみの削減」や、「ボランティア参加者の増加」など具体的な数値も含めて説明会などで目標を示すところも増えています。ぜひ、そのことを忘れずに活動に参加したいものです。

< 時代とともに・エコへの取り組み >

1997年12月に京都で開催された「気候変動枠組条約第3回締結国会議(COP3)」で採択され、二酸化炭素(CO2)など6種類の温室効果ガスについての排出削減義務などを定めた京都議定書の日本の目標である6%削減達成の約束期間が、2008年4月から

スタートし2012年までとなっていることで、従来は製造業などの企業とウォームビズ・クールビズの取組みなど行政が主体であった「チーム・マイナス6%」の活動が、少しずつスポーツにも広がっています。たとえばプロ野球の日本野球機構では「グリーンベースボールプロジェクト」と題して、ゲームの時間短縮による照明などのCO2削減のほか、チームごとにさまざまな目標をかかげて環境活動に取り組んでいますし、仙台では「エコシティ仙台・プロデュースプロジェクト」をサッカー・野球・バスケットボールのプロ3チームと環境市民団体・ボランティア・観客が連動して進めており、分別率を高め、可能な範囲でのリサイクル率アップに取り組んでいます。

レジ袋や家庭ごみの処理料の有料化などに向けて、多くの子供も含む観客が集まるスポーツイベントだからこそ啓蒙の意味も含めて社会の動きに即した取組みが大切です。ただし、現在の取組みは全国的にはまだまだ点であり内容もバラバラ、これをどうネットワーク化しより効果の上がるものにするか取組みは始まったばかりです。

<災害や救命の活動との連携>

家族でのスポーツ観戦、それは平和の象徴ともいえるシーンです。しかし、観客が増加しイベントの機会がふえることは一方でさまざまな危機管理面でのリスクが増えることであり、「事故」「急病」「地震」「台風・大雨」「停電」など万が一のトラブルに対する準備が運営する側に求められるのです。しかし、現実にはスタジアムや体育館などからの避難訓練すら少なく危機管理全般に十分な体制がとれているとはいえないのが実情です。

予測できない災害や事故はチーム側・主催者側のスタッフとしてみられるボランティアにとっても無縁のものではありません。最初に「救命」ですが、病人やケガ人が発生した場合、まず主催者のスタッフに連動しその指示をあおぐことが大切です。しかし、初期の対応として消防署などが定期的に地域で開催している「救命講習」などに参加し基本だけでも理解していれば、その分だけ冷静で適切な対応が可能になります。その知識や経験は決してボランティア活動時だけにいきるのではなく、通常の家や職場での生活時にもいきるもの、ぜひ自ら積極的に受講したいものです。

次に「災害」ですが、多くのスポーツ施設は災害時には避難所として決められている場合も多く、直近では中越地震の際にサッカーアルビレックス新潟のホームスタジアムである「ビックスワン」の駐車場が「支援物資」の集積所として使用されるなどここ一番の際には地域の拠点として重要なものとなります。まずはその意味を十分に理解し自分たちが活動する施設をみてもいいでしょう。

また、イベント開催時の災害では、Jリーグの大分トリニータの熊本での主催ゲームにおいて、大雨の影響でゲームが中断しさらに駐車場に停めていた観客の車が水没し被害が発生、同じく甲府の試合ではゲーム中に停電が発生するなどの事例がありました。多くの

場合こうしたトラブルは突然発生します。災害発生時の心構えや、避難のための動線や場所については、定期的な研修会などを通じてぜひ確認しておきたいものです。また、不特定多数の人々のために活動するという面では、スポーツボランティアと災害ボランティアには共通性も多いとされます。日ごろから基礎知識を学ぶことでいざ災害発生時には地域社会のために役立つことも可能となります。災害組織との連携は今後のテーマとして大変重要なものになるのではないのでしょうか。

< 地域とのつながり >

プロスポーツでは継続的な観客数やそのベースとなる人気を拡大するために、実に様々な活動を拠点となる地域で行っています。その際にいまや当然のように使われるのが「地域密着」という言葉です。「地域」にはさまざまな住民がくらしていますし、広いエリアは様々な特性をもっているはずです。港が近い、山が近い、工場が多い、小さな商店が多い、大きなターミナル駅がある、その特性に合わせて何ができるのか、逆にいえば何が求められるのかが違ってきます。

現在はJ1で強豪クラブに育ったチームがあります。その営業の方をお話ししたときにこんな話をききました。「確かに多額の協賛をしてくれる大きな企業はありがたい、しかし、景気などで左右されるそうした支援に対して、地域の商店や企業は金額は小さくても長く熱心に応援してくれるんです。ですから、大変ではあるけれども地域のサポート企業をいかに増やすかを大事にしたいと思っています。」彼のスケジュール帳には、そうした商店街のお祭りや打合せ日の日程がびっしりと書き込まれていました。

一方で、将来を見据えて小さな子どもへの取組みを徹底しているのがジュビロ磐田です。菅野さんというトレーナーは長年地域の幼稚園をまわって子供たちの食事も含めた体作りについて話し続けていますし、ミュージカルを作って子供たちを招待することもやりました。大切なのは、目先のことだけでなく将来を見据えての活動であるのでしょう。

「地域」、そこにはいろいろな世代の人が住み、企業・学校・行政をはじめたくさんの組織もあります。今、ここにいる私たちボランティアも、地域に戻ればそうした組織の一員であり、そこで出来る活動もまたあるはずです。

(4) スポーツボランティアはどんな活動をしているか。

<スポーツボランティアの種類>

スポーツボランティアの定義にはさまざまなものがありますが、ごく一般的には「自主性・自発性」があり、「無償性」「公益性」のある活動で、最近ではそこに「継続性」と「先駆性」を加えるという考え方が広がっています。けれど、それはあくまで原則であり、日々変化しているスポーツボランティアの世界では、現状の基本的な捉え方とお考えください。

上記の大きな考え方の中で、スポーツのボランティアの種類を分けて見ます。

図 <スポーツボランティアの種類>

継続型	イベント運営サポート	受付・案内・エコなど
	専門技術サポート	医療・障害者対応・警備・通訳など
	クラブ・チームサポート	清掃・イベント参加・広報など
単発型	イベント運営サポート	受付・案内・エコなど
	専門技術サポート	医療・障害者対応・警備・通訳など

いずれも一般のボランティアや技術を身につけた専門家(アスリートも含む)がサポート

スポーツに関するボランティア活動で、全国各地で幅広くそして多くの方々が参加しているのが、スポーツイベントでの活動です。ごく最近の事例では、2007年から開催されている「東京マラソン」において、3万人を超えるランナーに対し約1万2千人のボランティアがサポートしたことは大きなニュースとなりました。こうしたイベントが継続的に開催され、そこでボランティアが活動する場合はそこにボランティアの組織が作られ、主催する側と連携してさまざまな活動をすることになります(継続型)。一方で、国体・オリンピックなどのように全国や各国持ち回りで開催されるスポーツイベントは、一時的にそのイベントの運営をサポートするボランティア組織が作られますが、イベントが終われば組織も消滅するのが一般的です(単発型)。

イベント以外では、総合型スポーツクラブの運営や、さまざまな種目のスポーツのコーチやサポート、スポーツイベントの運営をするクラブやチームの活動を支援する活動においてもたくさんのボランティアが活動しています。

第2章 スポーツボランティアの広がり ~ いつかまちやひとを変える日がくる

1. 課題を減らす、改善する

どんなものにも常に課題や改善すべきポイントはあるものです。特に日本ではスポーツのボランティア活動そのものの歴史が浅くまだ認知も乏しいことから多くの人々が日々課題を見つけ改善することに取り組んでいるのが実情です。そこには創生の時期ならではの苦労もあれば喜びもあるのです。まずは孤立せず思いをともにする仲間と一緒に課題を考えてみたいと思います。

(1) スポーツ・イベントならではの課題～運営する側の問題

< ボランティアの窓口 >

プロスポーツのイベント運営に関わる人々（フロントスタッフなどとも呼ばれます）の中には、年間契約という制度で一年ごとに雇用契約をやり直したり、企業などからの出向で一定期間を経過すると元の企業に戻ってしまったり、行政関連の場合は定期的な異動によって担当が変わることが頻繁におきています。（以前よりは大分少なくなりましたが）その結果、ボランティアの活動に関する中長期的なビジョンが作られなかったり、運営の方法が人が変わることで後退してしまう事例が生まれていると聞きます。以前とあるイベントで「リーグの中核にいる方が「フロントスタッフにはもっともっと様々な勉強をしてほしい」という趣旨の発言をしていましたが、あまりに流動的な運営の体制にも学ぶことを阻害する大きな要因があるのではないのでしょうか。

窓口が安定しないことによる課題

- ・ ボランティアと運営する側とのコミュニケーションが混乱し不足することがある。
- ・ ボランティアの自立や育成など将来へのビジョンが作れない。
- ・ ボランティアの情報やノウハウが蓄積されず継承されにくくなる。

スポーツイベントの運営組織はその多くが財政的に厳しい環境にあります。このため、ボランティアの窓口担当は一人か二人が一般的でしかも他の業務と兼任という場合もみられます。こうした中で上記の課題を克服するには、継続的に活動しているボランティアの中から事務局をサポートできるようなメンバーを人選し育成するなど、ビジョンや活動の方法などをあらかじめとりまとめて仮に運営の責任者が変わることがあっても、活動がスムーズに続けられる仕組みが大切になると考えられます。

< 位置づけ >

やや抽象的な話しですが、そもそも一般市民の中からボランティアをスポーツのイベントで受け入れることにはどんな目的があるのでしょうか。

例

- ・ 従来スポーツを支えてきた学校・企業からの支援が弱くなったため

- ・ ボランティアを活用することで、実質的なコスト削減が期待できるため
- ・ 市民が参加してもらうことで、地域とのつながりが出来るため
- ・ 専門的な知識が必要な活動があるため
- ・ イベントにかかわることによる支持基盤の拡大や広報的な役割を期待して

積極的な目的からやや消極的なものまでさまざまな目的があるのですが、ボランティアの運営をする場合この目的をぜひ明確にしてほしいものです。その上で、せめて最低でも年度の単位でその目的に対してどれだけの成果や効果があったのか、今後、それをどう変えていきたいのかを検討してほしいのです。本来、イベントやそれを開催する運営組織にはそれ自体に目的や達成したい目標があるはずですからボランティアといえども、その目的や目標と一体となった活動が求められるのです。

具体的には「ボランティアの数を年度内に 名にしたい」「クレームの件数を %減らしたい」「地域活動への参加を 回にしたい」「発生するごみのリサイクル率を 割にしたい」などわかりやすい目標があり、そのために実行することがあらかじめ説明されていれば、活動の方法や中身にきっと変化がおきるのではないのでしょうか。

< ボランティアとの関係作り >

スポーツのイベントを開催し、ボランティアに協力を依頼する人々は通常仕事としてサラリーをもらっています。一方でボランティアは無償に近い形で活動していますので、時として責任や権限の面に対立することがあります。具体的には運営する側からの「急な変更」であったり「命令調の言葉使い」であったり、ボランティアに参加する側の「無断欠席」や「ルール無視」の身勝手な行動であったりとその要因は実にさまざまです。その改善のためにはどんな場合でもまずは互いを一人の人間として尊重しあうことが大切ですし、コミュニケーションのための仕組み作りと互いに確認したルールが重要となります。そして、最期はいかに共通の目標の実現に向けて楽しく活動するか、そのことを忘れないようにしたいものです。

もう少し詳しくみてみます。まずボランティアに活動を依頼しサポートをうける立場では、ルール通りに活動してもらい、何事もなくイベントが終わることが重要です。一方、活動するボランティアにとっては、常にどう楽しく活動するかが重要なのです。そのため、より良く改善したいという思いは多くの人の中にありますし、現場にいて観客と接することが多いポジションほど、さまざまな観客からの意見や要望も受けるのです。こうして生まれてくる要望・意見をどのようにいかしていくか、その仕組みが大切でありボランティアの活動のモチベーションにも影響するのです。

100人のボランティアがいれば、100通りの意見があり全てに対応することは無理、ということボランティアの窓口をする方から聞いたことがあります。コストや安全、衛

生、更には施設などさまざまな制約も影響しますから、それはある意味当然のことです。そこで必要なのは、どんな内容であれ、誠実に「答えを返すこと」ではないでしょうか。例えば「観客からあったかい食べ物を販売してくれといわれました、対応してください」という要望に対し、無視するのではなく「公園法によって火気の使用が禁止されていますので現状では困難です、ご了承願います」など出来ない理由を伝えることもひとつの立派な回答なのです。知ってほしいのは、ボランティアは常にこれから先の完全をめざし現状を変えてゆこうとする存在だということです。

< 活動の状況を知る >

近年、週末を中心として年間を通じてさまざまなスポーツ・イベントが開催され、テレビでもみるのが可能になりました。つまり、ボランティアの活動の場も広がっているのです。この結果、活動の内容によってはきわめて厳しい活動環境も生まれてきています。屋外のイベントでは雨や雪、強風の中での活動もあれば、防寒着をきても体の芯まで冷え込むような場所から、猛暑の中での活動もあります。会場が広く反対側の席まで案内すると30分近くもかかる施設もあれば階段が長く急なスタジアムもあります。ごみを扱う活動ではにおいや汚れは当たり前であり、一定の場所に長時間立ちっぱなしとなることや、準備のために早朝に集合することや、後片付けをすると深夜に終わる場合もあります。こうした状況をより難しくしているのは、負担をどう感じるかは年齢だけではなく個人差があるということです。

まずはこうしたボランティアの活動の環境を、ボランティア担当者はもとよりイベントの運営組織のトップまでが正しく理解してほしい、そう思います。プロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルスでは、球団トップの社長やスタッフ、売店の責任者までもが年に一回ボランティアの活動に参加し、実際に体験していますし、プロのスポーツのイベントでは他のチームのゲームに際にボランティア活動を体験するボランティア担当者もふえています。最善の方法とはいえないまでも、主催ゲーム時にはさまざまな仕事で忙殺される担当者にとっては次善の方法ではあります。そしてより効果的なのは、活動中にこまめに巡回し顔を見て声をかけることです。それは決して楽なことではありませんが、無理をしてボランティアが病気になったり事故を起こすことを未然に防ぐことにつながるはずです。知っていただきたいのは「活動している環境」をわかろうとする姿勢、そして完全ではないまでも理解した上での的確な対応なのです。

< 存在を認める >

あるスポーツイベントのボランティアに参加した時のことでした。初めての会場であり、規模も大きいものだったので、どんな活動になるのか不安を感じていました。やがて時間となり、ボランティアが集合し運営のボランティア担当らしき人が名前を読み上げてポジ

ションを指定、次にポジション別にイベントの運営会社のスタッフの案内のもとに移動し、活動内容の説明を受けました。その結果はっきりしたことは、最初のポジションと簡単な活動の手順だけで、その後の交代・休憩・活動については全てそのスタッフの指示を待つこと、ということだったのです。幸いにも開場までに時間があつたため仲間と一緒に座席の区分・トイレや売店の場所や販売している内容・喫煙所の場所などはあらかじめ確認できましたが、本来であれば最低限会場内の図面や、おおまかなタイムスケジュール、基本的なルール（特に緊急時の連絡先や方法）に関する資料は用意するべきだと思いました。更にその後会場内の案内をはじめさまざまな活動を経験することになったのですが、全てイベント運営会社の若いスタッフが突然現れ指示をする形で、いつまで、どのようにその活動を担当すれば良いのかは最期までわからないままでした。

ボランティアのサポートを受ける側の難しさは、性格も十分にわからないボランティアで、しかも常に顔ぶれは一定ではなく、人数も決して多くはない中で休憩時も含めてどうスムーズに運営していくか、を求められることでしょうか。そのためには一人でも多くのボランティアに活動に必要な知識を的確に与え、積極的に活動してもらえることが大切になります。主催者とすれば「責任と権限」を極力小さく負担感を減らしたいのかもしれませんが、「責任と権限」の全くないボランティア活動は、参加する側からすれば単なる労働提供であり、楽しさを感じないものでしかないのです。自らすすんで参加してくるボランティアであれば、その存在を認めきちんとした活動内容の説明とともに、そのポジションを任せることがボランティアにとっても進歩やささやかな自己実現が達成できるのです。

< 共に育つ >

継続し繰り返し開催されるプロスポーツなどのボランティアに対してはシーズンが始まる前に、説明会や研修会が開催され、活動の目的や内容、さまざまなルール、活動日の登録手順、連絡方法などを伝えるほか、活動場所となる施設の見学を行うケースもあります。意識を高め目的・目標を共通化し、何より活動内容を理解するためには貴重な時間といえます。まずこの段階で注意したいのは、経験者と新しい参加者との対応です。ともすると「この点は昨年と同様です」「みなさんもうおわかりでしょうが」など経験者を意識した説明を聞く場合がありますが、初めての人に対してはやや配慮に欠けたものといえます。もちろん、活動経験が長い人たちの中には、基本的な説明を長々と聞くことに反発する人もいますので、出来れば「経験者」「新規応募者」の時間を分けて、対象にあわせた内容で説明したり、共通な項目が終わり次第、休憩をはさんで「新規応募者」だけに残ってもらいより詳しい説明や質疑応答を行うと良いでしょう。

さて、これはどんなものにも共通することでしょうが、活動の経験が長くなるにつれもっと自分を成長させたい、活動をよりしっかり楽しみたいという意識が生まれます。しかし、成長するための場は十分とはいえないのが現状です。スポーツのイベントの際に貴重

な時間と体力を使って協力してもらい、そのことに感謝する姿勢が強すぎるあまり半ばお客様の対応してしまったり、とにかく決められたことだけを余計なことを考えずに実行してほしいため、ボランティアから質問や提案をしても「それはあなたには関係ありません、こちらで対応します」など、全く受け付けない極端な例もまだみられるといいます。こうしたその場さえ良ければという姿勢はボランティアに確実に伝わり、活動意欲を低下させる大変もったいない対応ではないでしょうか。

多くのスポーツのボランティアと話していて感じるのは、自分を少しでも高めたいという欲求があることです。仙台での事例を見ると活動に直結する「エコ」「救命」「災害」などをテーマにした研修には、リーダー的な方々をはじめ幅広い人々が参加していますし、最近では研修と交流を目的として他のチームの主催ゲームでの体験ボランティア企画も活発化しています。Jリーグでは、サッカーの振興のために、ジュニアやユースなど年代ごとの育成の仕組みを作り成功していますが、自らチームやスポーツイベントをサポートするボランティアについても、できればオフシーズンも含め年間を通じて希望によってボランティアが成長できるシステム作り必要ではないでしょうか。

<活動を記録し伝える>

ネット環境の進歩によって「スポーツボランティア」の活動の情報もかなり目につくようになってきました。けれどまだその段階にとどまっており、テレビや新聞などより一般的なメディアで取り上げられることは少ないのが実情です。その意味では限定された範囲（運営者からボランティアへ、ボランティア同士など）での情報交換が中心で活動の記録や多くのボランティアの歴史も残ることはきわめて少ないといえます。また、情報誌などが作成されているJリーグのボランティア組織もありますが見ることはできるのはクラブ関係者やボランティアに限られており、なかなか外部から見ることができません。ただし、スポーツボランティアの活動を記録しまとめたものを一般にも公開する試みは皆無ということではなく、日産スタジアムボランティアのホームページでは「ボランチわ」という情報誌が、そしてSV2004のホームページからは「SVニュース」という情報誌を見ることができます。

活動しているボランティアの姿を正しく地域社会に向けて伝え、理解を高めるためにも更に、ボランティア同士の相互理解や情報の共有のためにも活動を記録し、伝える努力はぜひ続けていきたいものです。そのためにはまずパソコンの操作などに慣れたボランティアの中から「情報係り」を選任し、写真や活動の変化に対する記録をまとめることからスタートし、そこでの具体的な成果などをホームページはもとより会場で配布されるチラシやプログラムなどに可能な限り公開し、常にオープンにしていく姿勢が大切なのです。

< 組織の理想像 >

近年長くボランティア活動が続けている組織に共通した取組みがみられるようになってきました。それは「ボランティアの運営を一定のルールの中でボランティア自身に任せる」というもので、いわば運営組織と一般のボランティアの間に時には潤滑油として、時には接着剤として機能する組織を設け、運営やコミュニケーションによって生じる課題や問題点についても一定の権限を与えることで解決しようとするものです。

その活動の事例を具体的に紹介してみます。仮に担当名を「事務局ボランティア」としておきます。事務局ボランティアのメンバーは経験年数が長くさまざまな経験が豊富であり、社会人としても良識をもった判断ができる人が任命される場合が多いようです。個人情報の問題があるためボランティア登録者への連絡などは運営する組織で行いますが、それ以外の活動では事務局ボランティアが中心となります。

事務局ボランティアはいわば、運営する側とボランティアをつなぐボランティアのための世話役という側面を持ちます。その形のひとつが「ボランティア係り」、ボランティアの控え室で参加の受付をしたり、備品や弁当の受け渡しや今後のスケジュールの確認、更には新しい参加者に対し会場の中を案内したり、活動ルールや活動内容の説明をしたりする大切なポジションです。ボランティアの控え室には、掲示板が設置され運営者からの情報や連絡事項のほか、ボランティアからの提案によって実現した変更点や改善点なども掲示されます。このフォローもボランティア係りの役割です。多くのボランティアが活動する場合は名前と顔が一致することだけでも大変なことです。その意味では必然的にボランティア係りを通じて得られる情報も多くなるため、適切な人員の配置が大切です。

事務局ボランティアは常に一般のボランティアの目線で活動に注意を払います。特に事前に運営スタッフと当日の運営のポイントを確認し正しく一般のボランティアに伝えることや、イベント中の休憩や活動時のトラブルに気を配り、出来る限り多くのボランティアに声をかけ安心感を与えることが望まれます。また活動を通じて届けられたボランティアからの改善要望については、ボランティアの代表として可能な限り迅速に回答したいものです。

2. スポーツを取り巻く変化

(1) 社会の変化

<人口減少と都市集中の流れ>

日本の社会は少子高齢化の時代を迎え今後国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」(2002年1月)の中位推計によると、わが国の総人口が2006年を境に減少し始め、2035年には現在よりも約1,400万人少ない約1億1,360万人に、さらに2050年には総人口が約1億人になると予測されており、スポーツにとっても「する」「みる」「ささえる」の全ての活動に影響が予測されています。プロスポーツであれば最も重要な観客数や協賛企業の減少が見込まれるでしょうし(もちろん、全てのチームにあてはまるわけではありませんが)、地域や国からの税金収入が減少する中で財政赤字への対応に苦しむ地方自治体も増加し、プロアマを問わず「地域密着やスポーツ振興」という目的のためにサポートを続けている行政からのスポーツ支援も、長期的には削減されると予測されます。あわせて国勢調査の結果によれば、一定の人口密度を超える「人口集中地区」に住む人の割合(市部人口比率)が、広域合併などの影響もあるとはいえ、1960年の63.3%から2005年には86.3%と増加、人口密集地と過疎地がより鮮明になりつつあります。特にプロスポーツにおいて、大都市圏に強豪チームが集中するのはこうした社会的な変化と大きな相関関係があると思われ、地方のチームの立ち上げやその後の経営はますます困難なものになると予測されます。だからこそ、大都市圏とは違うその地域ならではの市民との関係作りが必要です。

<団塊世代の動き>

仙台市では昨年近い将来のシニアの社会参加を想定し「シニア活動支援センター」を設置しています。実際、2007年から2009年にかけてはいわゆる「団塊の世代」である約677万ともいわれる人々が定年を迎えます。その多くは再就職や起業、そして市民活動に関わると予測されており現実に行政や関連するNPOへの相談が増加する傾向にありました。そこで「主に定年を意識し始める50歳後半以降のシニア世代の方を対象に、地域や社会の課題解決のために行う活動や新たな事業などを起こすなどのチャレンジを応援する総合窓口」としてセンターが設けられたのです。実際にはシニアの希望するさまざまな活動への相談対応、必要な情報の提供、学び交流する場としての定期的なサロンの開催が柱となっていますが、シニア世代をサポートする様々な組織のネットワークの核としてもその役割が期待されます。

一方、スポーツボランティアの年代構成をみると、たくさんのシニア世代の方々が元気に活躍しています。定年や子供の自立によって自分の時間を持ち、地域や人のために役に立ちたいという前向きな姿勢がそこにあります。これはもちろんスポーツボランティアに

限ったことではありませんが、今後はいかに活動を知ってもらい、その経験を活かし、楽しく活動できる環境を作っていけるかの視点と継続的な取組みが求められます。

< プロスポーツのチーム作り >

人口の都市圏集中はとりもなおさず地方の多くの地域の衰退を意味します。若者が流出し高齢化がすすみ、農業や様々な産業が後継者の不足によって打撃を受けています。そうした変化に対し新潟ではさまざまな特色のある専門学校をはじめとする教育機関を設け、卒業後も地域で働ける環境を作るために企業の誘致やベンチャー企業などへの手厚い支援を行っています。さらに、地域に誇りを感じ一体感を感じさせるものとしてアルビレックスという呼称を用いて「サッカー・バスケットボール・野球・陸上・ウィンタースポーツ」などのクラブを創設し、プロの選手のすぐ近くでアマチュアの人たちも練習できる環境を作ろうとしています。まだその取組みの成果は十分ではありませんが、多くの観客で埋まるサッカーのビックスワンやバスケットボールの朱鷺メッセでは、若者の姿が目立つことも事実です。「スポーツでまちを元気にしたい」、古くはサッカーJリーグの鹿島や磐田が全国的にはほとんど無かった知名度を、地元クラブの活躍によって全国区に引き上げたように新潟の事例から学ぼうとする地域が多いと聞きます。たとえばサッカーのプロリーグは、J1に18クラブ、J2に19クラブあり、合計37クラブとなっています。けれどJクラブのない空白県は実に20県にも上っています(10年6月現在)。今、空白の県の多くではJリーグをめざす取組みが始まっています。決して平坦ではないクラブ作りですが近い将来全国各地で地元のチームを応援するサポーターの姿がみられるはずです。更にプロスポーツということでは、同じようにプロバスケットボールのbjリーグや、野球の独立リーグも全国に年々チームが誕生しています。

(注) Jクラブのない県(2010年6月現在)

東北では青森・岩手・秋田・福島、関東上信越では長野、北陸東海近畿では、石川・福井・三重・滋賀・奈良・和歌山、中国四国では鳥取・島根・山口・香川・高知、そして九州では長崎・宮崎・鹿児島・沖縄です。この内Jリーグ昇格の条件となる準加盟クラブが2010年にJFLで戦っているのは鳥取・長崎・長野となっています。

関東の町田・相模原も準加盟を認められています

< 総合型スポーツクラブの増加 >

第1章でもふれたように、2010年までに全国の各市町村に最低1つ以上の「総合型スポーツクラブ」を作る取組みが進んでいます。その結果、あと2年を残す2008年2月1日のデータでは既におよそ2千のクラブが誕生し、設立準備中のものが5百強となっています(日本体育協会ホームページより)。プロスポーツやさまざまなスポーツイベントが「みる」スポーツという傾向が強いとすれば、この総合型スポーツクラブは「する」

スポーツの場として期待されます。そして、プロスポーツでは今やたくさんのボランティアが活動しチームやイベントを「ささえる」形ができつつあるのに対し、今後、より地域に根ざした総合型スポーツクラブにも、確立した組織的なボランティア制度が生まれていく可能性は高いと考えられます（現実にクラブの運営スタッフやコーチなどをボランティアとして担当している人々がたくさんいます）。

（注）日本体育協会によれば「総合型の地域スポーツクラブとは、自主運営・受益者負担の組織として、2種目以上の多種目のスポーツ活動が行われ、かつ多志向・多世代が活動基盤を共にし、コミュニケーションを図りながら永続的に活動するクラブのことをいう。また、一貫指導体制の確立やクラブや地域の拠点となるクラブハウスの確保もクラブ作りの重要なポイントである」としています（公認アシスタントマネージャー養成テキストより）。

3. これからの可能性

<支える仕組みが必要>

スポーツのボランティアのおかれている環境、そしてそこから生じるさまざまな問題点はまさに、多くの総合型スポーツクラブがその運営においてかかえている状況と類似しています。それはとりもなおさずスポーツを取り巻く大きな環境変化の中で、きわめて活動の目的や内容が近いということを示しているからではないでしょうか。

まずは「人」の問題があります。今、多くのクラブそしてボランティア組織で参加する人が集まらないという課題をかかえています。認知が乏しい、参加する楽しみ・魅力が不足している、地域とのネットワークが作れない、何より中心となるべき人が育たないなどその課題は多種多様です。次に「運営」の問題があります。組織的なまとまりが作れない、内部のコミュニケーションがとれない、資金が乏しく活動の拠点が無い、既存組織との調整がとれないなどこれも共通した課題をかかえています。そうした中では今の段階ではボランティア組織であれば運営主体となるべき組織が、そして総合型スポーツクラブであればその立ち上げやサポートをすすめる広域スポーツセンターの役割がますます重要になると考えられます。つまり「支える人」を「支える仕組み」が重要になるのではないのでしょうか。

2008年5月、静岡県の掛川市で「全国スポーツクラブ会議」というものが開催されました。全国スポーツクラブ実行委員会と地元の体育協会が主催し前年から始まったもので、テーマは「長期継続クラブをめざして」であり「自主・自立」を大切にして運営する会議と謳っています。ここには自費で全国の総合型スポーツクラブの関係者はもとより、それをとりまく行政もふくむさまざまな人々が参加し、かなり具体的な話し合いもなされています。これに対しスポーツボランティアの分野ではサッカーのJリーグにおいて、「全国ホームタウンサミット」というイベントが全国のJクラブを支援する組織が主体となっ

て年一回持ちまわりで開催されていますが、多様目・多地域をまきこむものとはなっていません。しかし、こうした場で互いにビジョンや課題、何より改善策を共有したり、情報や意見の交換ができるネットワークをつくるベースを持つことは非常に大切なことだと思います。スポーツボランティアの活動の中でイベントを企画してきて、最も人気が高いのが「他地域や他種目のボランティア活動を紹介する」イベントという事実は、今後の「スポーツボランティアの全国ネットワーク」の必要性を象徴している気がします。

< 自立の可能性 >

いくつかのボランティア組織に関わってきて感じるのは、活動の楽しさや続ける意欲を継続することの難しさです。本来自発的にさまざまな思いをもって参加する活動ですから、その「思い」がどれだけ実現できるかが大切です。しかし、ボランティアは多くの場合には組織としてルールも含めて一定の制約の中で活動するため、「思い」との間にギャップが生まれ、組織に対しストレスを感じて活動を止める人も少なくありません。そうした課題を改善するには、スポーツイベントを運営する組織とボランティアがどのような関係を作ればよいかのことが大切になります。ボランティアの組織をみた場合、単発のスポーツ・イベントの場合の多くは、その期間に設けられる開催のための組織(実行委員会など)や、毎年繰り返し決められた期間に開催されるイベントの場合は、その開催地域のスポーツ団体がボランティアを募集し組織化するとともに、運営のためのサポートを行い、開催期間が終了すると組織は解散するか休眠します。(本来毎年開催するイベントの場合は、何らかの形で組織を生かしていく工夫が必要ですし、経験をいかしていくことも大切ですが、現実にはそうした事例はあまりありません)

一方、継続型のボランティア組織については、様々な形態があります。下記にその代表的なものを掲げます。

図 《 継続型スポーツ・ボランティア組織の形態 》

組織名	組織内容	一例
主催者型	もっとも中心的な形で、スポーツイベントを運営するクラブやチームが組織する形	楽天イーグルスボランティア 東京ヴェルディ 1969
後援会型	特定のクラブやチームを応援する後援会がボランティアを組織する形	浦和レッズ後援会 柏レイソル後援会
行政型	行政やその関係機関がボランティアを組織しイベントに派遣する形	広島スポーツ協会 うつくしまｽｰｰﾙｰﾀｰｽﾞ
施設型	特定のスポーツ施設のためにボランティアが組織化される形	神戸ウィングスタジアム グランディ 21・ボランティア
市民型	市民有志がボランティア組織を作り依頼により各種のスポーツをサポートする形	SV2004

現在はスポーツのイベント主催者がボランティアを組織化する「主催者型」がスポーツのボランティアの中心となっていますが、社会的な指定管理者制度の拡大などにもともない、主催する会社が施設全体の管理者になるケースもあり、それに合わせて「施設型」を採用するケースも増える傾向にあります。現在のところどの形がベストかはわかりません。しかし、方向性として運営者とボランティアが良い意味で対等の関係を作り、ゴールを共有して活動する体制を確立することが理想ではないでしょうか。

3章 スポーツボランティアの活動事例 ～ 仲間がいるから

1. スポーツ施設を身近に ～ グランディ・21ボランティア(宮城)

スポーツのボランティア活動のひとつの形として特定のスポーツ施設を拠点とするものがあります。そしてそのさきがけは2002年に全国10の都市で開催されたサッカーワールドカップのスタジアムに誕生したボランティア組織であったと思われます。

< 図 / ワールドカップ2002年日本会場 >

スタジアム名	完成時期	ボランティア発足時期	ボランティア名称
札幌ドーム	2001年6月		日本ハムファイターズボランティア
宮城スタジアム	2000年3月	2003年3月	グランディ・21ボランティア
鹿島スタジアム	2001年5月		鹿島アントラーズスポーツボランティア
埼玉スタジアム	2001年10月		浦和レッズスチュワード
横浜国際総合競技場	1998年3月	1999年	横浜国際総合競技場ボランティア
新潟スタジアム	2001年4月		アルビレックス新潟ボランティア
静岡スタジアム	2001年3月	2001年9月	エコサポーターズ
長居スタジアム	1996年		セレッソ大阪ボランティア
神戸ウイングスタジアム	2001年10月	2003年3月	ウイングスタジアムボランティア
大分スタジアム	2001年3月		大分トリニータボランティア

(注) 印「施設型ボランティア」 印はスタジアムを拠点とするチームのボランティア

鹿島と長居は改修の上ワールドカップ会場として使用 (完成時期は改修時期です)

図の通り現在全てのスタジアムでボランティアは活動しています。しかし、その内6つはそのスタジアムをホームとしてゲームを行うクラブが組織しているものであり、基本的にはチームの主催ゲーム以外のボランティア活動はしていません。一方「宮城・横浜・静岡・神戸」では、その施設管理者自体がボランティアの運営主体であることから、スタジアムで開催される多様なイベントで活躍しており施設型ボランティアといえます。

そして、そのひとつが「グランディ・21ボランティア」なのです。宮城スタジアムを中心とする宮城県総合運動公園(通称グランディ・21)のスポーツイベントを既に2003年3月から5年にわたり支えています。誕生はワールドカップ直後、宮城国体(2001年)やワールドカップのボランティアを中心に、運営すること自体で大きなコストが必要な「施設」と「県民」との距離を縮め、自分たちの財産として育てていくことを目的としています。「立派な施設なのに人がいない、という状況ではなく、私たち県民自らがボランティアとして参加しサポートすることで、得られた感動と喜びをみんなに、特に子供たちに伝えたい」と発足以来キャプテンとして代表を務めてきた村松さんは言います。

具体的なボランティア活動はおおきく3つに分かれます。第1はスポーツのイベントのサポートで、規模の大きいものでは2006年のサッカー日本代表戦のサポートや地元のベガルタ仙台のゲームなどを、案内やエコ活動を中心として支えたほか、毎週のように開催される陸上関連の大会では、大型映像装置の操作なども担当してきました。さまざまな経験をいかして案内誘導のための大型看板を作成し設置したり、観客のスムーズな移動の

ためのアドバイスを行うなどその役割は、一般的なスポーツボランティアの領域を越えています。第2はイベントの無い日を中心にスタジアムの見学案内を実施したり、施設の周辺の花壇の手入れなどを行っています。また、こうしたボランティアの活動をまとめた情報誌や活動記録を発信する情報班もありホームページも設けています。第3の活動は自主企画によるものです。「ワールドカップの集い」や関連したシンポジウムの実施のほか、施設の管理者である財団法人宮城県スポーツ振興財団との共催事業にも積極的に参加しています。また、登録し活動しているボランティアのために忘年会など交流の場を設けボランティア活動の原点のひとつである「楽しさ」を提供しています。ふたたび村松さんに活動の特徴をお聞きすると「各種大会・イベントの共催や主催をするなどボランティアが主体的に動くことで、いわゆる担当制にならない独自性の高い活動ができていますことでしょう」といいます。その背景には誕生の際に、ボランティアの組織としての自立と活動の主体性の確保という視点から、パソコンやプリンター、会議用のいすや机までそろえたボランティアセンターを設けたことや、ボランティアのサポートを依頼され活動した場合に主催者から支払われる謝礼金なども活動の財源としており、一部助成は受けてはいるものの多くの人々の理解と協力もあってボランティア組織として自由度の高い活動ができています。

これからということでは、「人材の育成が大事になります。活動が始まって5年が経過し登録者の減少と高齢化が進んでいるのです」。その対策として「ひとつにはチョイボラという制度を作り中高生がちょっとだけボランティア体験をするという企画を作って参加者を募集しています。次に大きなイベントが無くなりモチベーションが低下したということがあります、その対応としてみんなで知恵を出し合い新しいことにチャレンジしたいと思えます」。その意味では2009年に予定されているJリーグのベガルタ仙台のホームスタジアムであるユアテックスタジアムの改修に伴い、今年1ゲーム、来年は複数のゲームが宮城スタジアムで開催されることが予定されていて、このチャンスをどういかに注目が注まれるところと見られます。

「また、来たいなと一人でも多くの人に思われるような、心のこもったボランティア活動をしたい」とするキャプテンの言葉はグランディ・21ボランティアのモットーです。見学案内やイベントのサポートも含めて子供を対象とした取組みも多く、その思いが届けばこれからもずっと身近で親しみを感じてもらえる施設となるはずと見られます。

2. ホームタウン共に「ジュビロ磐田ホームタウン推進協議会」

サッカーの日本代表の「中山・名波・藤田・奥・福西」などたくさんの有名選手をかかえ、チームカラーの水色のユニフォームがJリーグを席卷したクラブがあります。その名は「ジュビロ磐田」、ホームタウンである静岡県磐田市は当時人口約8万人（現在は合併により約17万人）のまちでした。確かにサッカー王国静岡県にあって、実業団でも強豪といわれた「ヤマハ発動機」を核として誕生したクラブは、一見極めて順調に歩んできたかに見えます。しかし、その影にあるクラブを愛しサポートしてきた人々の活動を忘れてはなりません。

日本にプロサッカーリーグとしてJリーグが誕生したのが1992年、ジュビロの歴史は1991年「ヤマハ発動機プロ化とJリーグを誘致する会」が発足し、誘致のためのイベントや署名活動をはじめたことからスタートしました。長く磐田の青年会議所で理事長を務めていた乗松さんは「まちづくり」のひとつとしてその活動の只中に飛び込んだと言います。それは92年にリーグに対し申請した段階でくぎりがついたかに見えました。が翌年リーグへの加盟が認められたのは同じ静岡県の「清水エスパルス」であり、一方でジュビロ磐田に対しては3つの条件が提示されたのです。

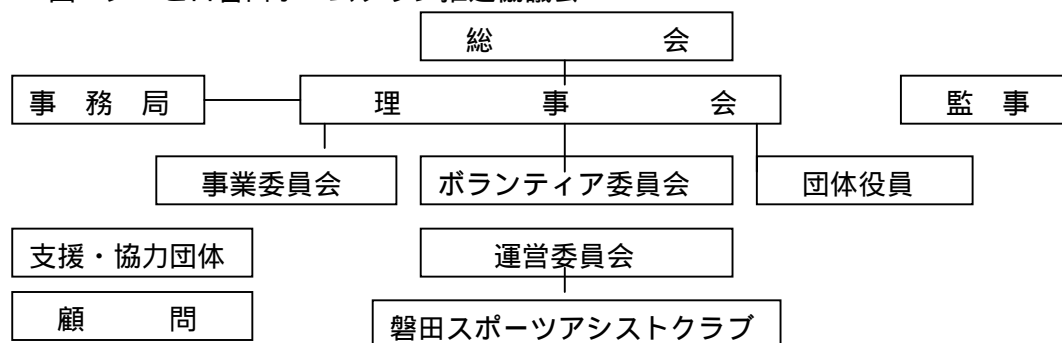
15,000人以上のスタジアム

チームの2位以内の成績

地域の盛り上がり（協力）以上、ジュビロ磐田ホームタウン推進協議会 HP より

これを受けて8月、青年会議所が主管となり「ジュビロ磐田ホームタウン緊急討論会」を開催し、新スタジアム建設の募金活動、J昇格の署名活動、そして地域のさまざまな団体を巻き込んだまちづくり運動が進められました。そして11月16日、念願のJリーグ昇格が決定するのです。その結果、昇格に向けて連携してきた組織は名称を「ジュビロ磐田ホームタウン推進協議会」とし、次のステップに向け新しいスタートをきることになったのです。

< 図 ジュビロ磐田ホームタウン推進協議会 >



サッカーを通して街が人が生活が元気になってくれればいい。そして、チームと地域をサポートすることでは「Jリーグで一番になりたい」、その思いは現実的なサポートとしてボランティアを組織しゲームの運営を支援するという形につながっていきます。それが「磐田スポーツアシストクラブ」の活動であり1996年のことでした。当初は人が集まらず街頭や成人式でチラシを配布するなど苦労があったといいますが、Jリーグの人気と地道な活動が実を結び、更に1998年のJリーグの年間優勝も追い風となってやがて多くのボランティアが集まるようになったのです。「クラブとは活動については、お互いに話し合っ

て決めています。問題点があれば解決に向けてクラブは理解を示してくれています。活動は、運営委員会を中心に自主的に行われているし、多くの世代(20代~70代)の人々が参加することで、世代間交流やいい意味でのしつけの場にもなっています」「そもそも地域のスポーツ文化の振興を目指し立ち上げたため、その後拡大したラグビーやジュビロマラソンのサポートにも問題は全くありませんでした。」と乗松さんは言います。

推進協議会としての課題はなんですか、という問いに対し少し考えてから「観客の動員数が減ってきていること、ボランティアの参加者が減ってきていること、プロチームが存在している意味を考えなくなってきていること等でしょうか。それは広域合併によって1市5町1村が合併し、人口も8万から17万の町になったことで逆に求心力が散漫になったこともあります。20代前半世代のサッカーとの接点が非常に少なくなっていることもあります。それは、ブームを経験したのが小学生低学年以下の年代なのです。よってこの状況が普通だと考えるべきかも知れません。磐田市では、全国女子サッカー選手権開催運営のため、アシストクラブとは別にスポーツボランティアの仕組みを作ったことも運営上多少影響があるかもしれません。サポーターもボランティアも年とともに年齢がアップし減ることはあっても新しい人の参加が少ないことが大きな問題」と乗松さんは分析します。「だから、まずは地域・サポーター・ボランティア・チーム・推進協議会の中の風通しを良くすること、何よりチームの応援をしたいという原点を忘れずに、結果だけでなくジュビロというチームの存在意義、磐田のスポーツ文化を共有していければ」と。それは「創造的破壊が必要、いろいろなイベントは継続的に実施されているけれど単なる事業の消化になっていないか、どこかで検証する必要があります。その意味ではいつも活動自体、新しい活動だと意識することが大切。当時の何も無かった原点に戻って、役割や段取りでなく、前向きな話し合いが必要と考えている」と言うのです。Jリーグが生まれて16年、磐田に限らずあちこちで支える組織や人にも世代交代の波が押し寄せていると感じます。少なくとも、そのことに目を向けて次のステップにしっかりと踏み出そうとしているそれが磐田の現状でした。

日本と韓国の共催で行われたワールドカップの前年である2001年、磐田には全国の

」リーグのクラブを支える人々が集まり「第3回全国ホームタウンサミット」がジュビロ磐田ホームタウン推進協議会の主催で開催されました。それ以前のサミットとは違って、多くのクラブが参加し、何よりボランティアの参加が多く、その後の交流の基点となったイベントでした。子供たちの健全な成長のための取り組みや、スポーツ施設と文化施設の連携など、そこで報告され話し合われた内容は今もまったく色あせていません。常に先行して課題に取り組む「ジュビロ磐田ホームタウン推進協議会」の活動にこれからも注目したいものです。

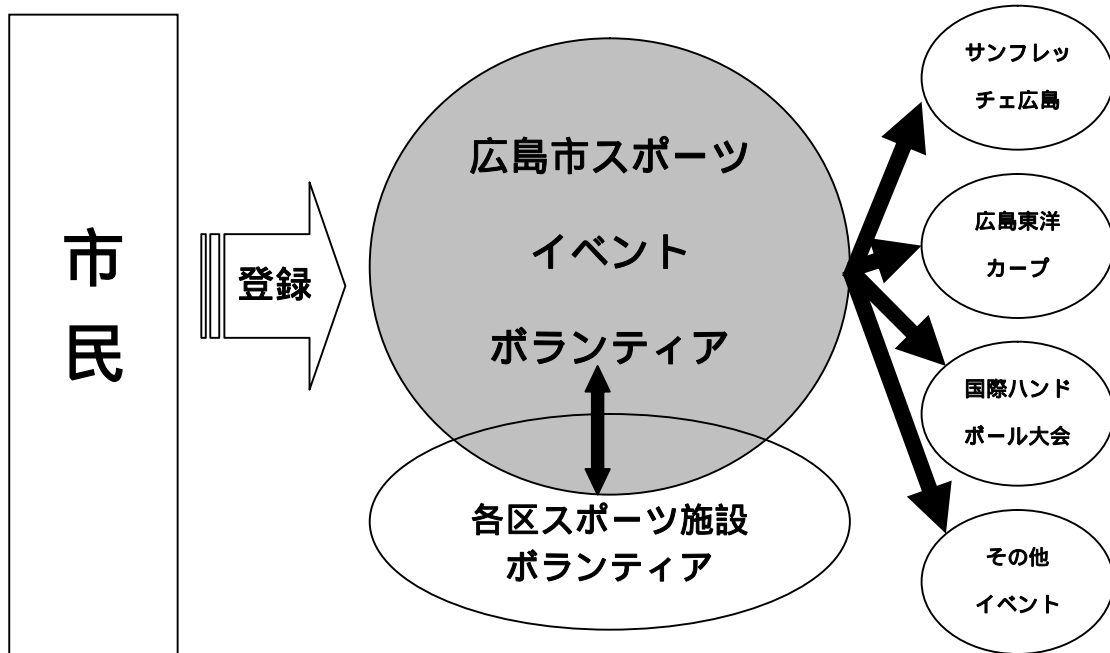
3. 多様なスポーツを支える「広島市スポーツイベントボランティア」

「ボランティアがいると会場全体の挨拶が良くなるんです」、広島市スポーツ協会がボランティア事務局を担当する長谷川さんは、そうボランティアの効果をあげてくれました。モットーは「お客様をもてなす心を持って活動する」、ですから説得力があります。

広島市は瀬戸内海に臨む中国地方の中核都市であり、人口は約117万人となっています。しかし、ことスポーツに関してはその人口規模以上に昔から実力のあるさまざまなチームが活躍してきました。プロ野球の広島東洋カープ、サッカーJリーグのサンフレッチェ広島、ハンドボール男子の湧永製薬(本拠地は安芸高田市)、ハンドボール女子のメイプルレズ、Vリーグ男子のJTサンダース、陸上の古豪中国電力、ソフトテニスのNTT西日本、この他にも女子ホッケーやバドミントンなど実に多彩なスポーツチームがあり、その多くが「TOPS広島」という組織に加盟し、地域のための活動に参加しているのです。

そのスポーツの盛んな町に、それを支えようという動きが市民から生まれたのは1994年に開催されたアジア競技大会にさかのぼるといいます。市民の意識の変化に対応する形で、2000年ビックアーチでのJリーグの試合などをサポートする「ビックアーチボランティア」の募集が活動が始まったのです。つまり、スタートはビックアーチを拠点とする施設型であり、これを翌年「継続型・複数施設型」に発展させる形で現在の「広島市スポーツイベントボランティア」が組織化されました。現在、活動の中心はサッカーのサンフレッチェ広島であり、国際ハンドボール大会での運営サポートです。ここに今年から本格的にプロ野球の広島東洋カープの活動が加わります。(2007年も一部のゲームでサポートしていました)その結果、「おそらく従来のサッカーが好きという方々以外に、野球が好きというボランティアの登録が増えるでしょうし、ゲーム数が多いため運営面の見直しが必要となる」可能性を事務局では想定しているようです。

そもそも広島市スポーツ協会は財団法人であり、さまざまな種目の協会、学区民体育団体などが加盟している組織です。前述の「TOPS広島」とも連携しスポーツの振興、競技力向上、育成事業など横断的なスポーツに対する視点を大切にした活動を行ってきました。現在のボランティア活動が、単一の種目に偏らず幅広いスポーツを対象としていることは、こうした事務局を担当する組織との関わりが大きいと考えられます。さらに「広島市スポーツイベントボランティア」のもうひとつの特色として、希望すれば身近なスポーツ施設でのイベント補助を行うため、各区の「スポーツ施設ボランティア」にも登録することが可能となっていることがあげられます。



具体的な活動で担当する業務は、「入場口業務」「案内業務」「ごみ回収業務」など、他の地域のスポーツボランティアと大きな違いはありません。しかし、通常ボランティアに対し連絡や参加確認をしたり、ゲーム前後に説明や反省点の確認を行うのがイベントの主催者側スタッフであるのに対し、ボランティアの活動の都度スポーツ協会から参加する事務局メンバーがその業務を担当していることが最大の違いです。そのため、事務局の担当は実に多様な業務を受け持つことになります。事前に各スポーツイベントの運営責任者と業務の内容を確認し、ボランティアへの募集の呼びかけをし、当日の配置の確認やサポート、アンケートのまとめ、シーズン中の研修まで、運営主体とボランティアの間でさまざまな調整役を果たすのです。「メリットとして、中間で運営サイドやボランティアからの意見を聞き、調整機能を果たすことで、ダイレクトに要求がぶつかりあうよりも円滑にものごとが進みます」、事務局の長谷川さんは笑ってそう話してくれましたが、多様な意見や要望の調整はご苦労もまた多いのではないかと推察されます。

今後のポイントは「同一日にイベントが重なるケースが増えるため、如何に活動への参加意識を高めるか、また、イベント当日にボランティアが書いてくれているアンケートへの的確な対応を大切にするとともに、研修会や交流会などを通じてボランティアの自立に向けた動きを支援していく」予定であり、予算の確保、自立した組織の規約などの準備にも取り組み始めているということでした。従来、広島に近い形態を採用していた鹿嶋市がアントラーズのクラブ直轄に2008年から変化した今、「継続型・複数施設・複数スポーツ型」の広島のボランティア活動が、今後どう展開するのか楽しみです。

4.楽しむことからサポートしたい ~ Alliance 2002 (新潟)

Alliance 2002 (アライアンス：連繫)の誕生の経緯は2002年のサッカーワールドカップの前にさかのぼります。当初アジア初として予定されていた日本開催がFIFA内部の事情を反映して韓国との共催と決まった1996年6月を受けて、国内では10ヶ所の会場を選定することになりました。スタジアムの規模や利便性・そして地域バランスなどを背景として大分・埼玉・横浜・札幌・静岡・大阪が内定し、残る4ヶ所を東北では青森と宮城が、関東では千葉と茨城が、関西では京都と神戸が争い、それぞれ「宮城・茨城・神戸」に決まるのです。そこで最期まで争ったのが愛知と新潟で結果新潟決定は最大の波乱といわれました。当時新潟では社会人チームとしてのアルビレオ新潟が活動を開始したばかりであり、既に名古屋グランパスがあり人口密度や企業のサポートの面でも愛知有利とみられていたからです。一方、圧倒的不利の状況から日本海側で唯一のワールドカップの開催地となった新潟はこれを契機として、スポーツでの地域振興に積極的に取り組むことになったのです。

まず、アルビレックス新潟(1997年アルビレオ新潟から改称)は1998年にJFLに昇格し、翌1999年からはJ2に参戦します。当時、ワールドカップ開催地にはその会場をホームとするJクラブがあることは当然という雰囲気があり、多くの自治体にも2002年まではチームを財政面も含めてサポートする、という姿勢が感じられました。それは、2002年を過ぎれば支援しない、というメッセージとも受けとられホームチームを支援する人々の中に危機感を生んでもいました。

Alliance 2002(以下、アライアンス)が誕生したのは、1998年3月であり、まさにワールドカップの開催が決まり2002年に向けて全国各地でさまざまな動きが始まろうという時期でした。現在の代表である金子さんに誕生の経緯を聞くと「2002年にワールドカップが新潟で開催され、アルビレックス新潟の誕生をうけてサッカーの楽しさ、ワールドカップの魅力を多くの市民に知ってほしかった」といいます。また、ワールドカップ後のアライアンスの役割をホームページ上では「サッカーという世界の共通語であるスポーツを、ワールドカップの行われたこの新潟に残していくことを目指して活動する」とし、そのために「観る(応援する)」「蹴る」「語る」そして当事者として「参加する」ためのコンテンツを提供するとしています。具体的には、過去においてはワールドカップと連動したイベント(CPサッカー大会やシンポジウムなど)の開催・サポート、継続的なものとして誰もが参加できるミニサッカークラブ(もくはちクラブ)の運営や新潟関連のサッカー情報の発信を行っており、アルビレックス新潟のゲーム運営(ボランティア)活動にも積極的に参加してきました。市民中心の組織を長く運営していくことは人的・財政的な面からも大変なことです。しかしアライアンスでは中核事業として位置づけられる「も

くはちクラブ」(毎週2回開催)には平均40人以上が参加し交流を深めており、既にアルビレックス新潟や新潟レディースの選手が育つなどの実績もあげています。また、ホームページで発信しているサッカー情報も2001年8月から一日も休まずに提供、その地道な取り組みは驚嘆に値します。

2002年のワールドカップの翌年、サッカーのアルビレックス新潟はJ2で優勝しJ1昇格を決め、席数42,300人のビックスワンを埋め尽くすその応援風景は全国のクラブの羨望的となります。また、サッカーだけでなく、2004年のウィンタースポーツの「チームアルビレックス新潟」の設立をはじめ、2005年にはプロバスケットボールbjリーグの「新潟アルビレックスBB」、陸上の「新潟アルビレックスランニングクラブ」、2006年には野球の独立リーグであるBCリーグに参加する「新潟アルビレックスベースボールクラブ」が次々に誕生し、高いレベルのスポーツを観戦し、応援に参加する環境が整うとともに、全ての競技においてこどもの段階からの育成の取り組みが始まっているのです。反面、選択肢の広がりには限られた地域においてスポーツ愛好者やボランティアを奪い合うリスクも生じており、現実にサッカーのボランティアは減少傾向にあります。チームがJ1に昇格して5シーズン目を迎え、ワールドカップ以前のような危機感はなくなりつつあります。そこにあることが当然、という意識はある種の無関心にもつながりかねません。「ホームチームをサポートすることの意味や価値を多くの人に知ってもらいたい」金子さんの声には先を見越した危機感があります。

アライアンスの活動の中心はあくまでサッカーであり、その核としてアルビレックス新潟のサポートは重要なものとなっています。このためホームページの中で本年の活動計画に「地域リーグ戦(40歳以上の壮年プレーヤーで構成されるチームによるリーグ戦)の開催」「もくはちクラブの運営」「新潟サッカー情報の提供」があることは堅実な取り組みといえます。しかし、それだけでは危機感を解消するだけの広がりを作ることは困難です。このためスポーツボランティアに興味を感じてもらうための「シンポジウムの企画」や、「各種大会(全国各地のワールドカップボランティアのフットサル大会や全国豊かな海づくり大会)の運営支援」を行い、更に新潟で活動するスポーツイベントの運営主体や行政関係者、商工会などと連携して「スポーツでもっと幸せなまちになるための懇談会」を立ち上げるとともに、2009年には全国のJリーグクラブのある地域でホームタウン活動に関わっている人々が集まる「全国ホームタウンサミット」の新潟開催に向けての体制作りがスタートしています。実に多様で息の長い活動ですがその目標が達成できたとき多世代・多世代が関わる総合型のひとつの姿が見えてくるように思います。

「楽しみましょう、何か目標を持ちましょう。そして、ちょっと疲れたら休んで、リフレッシュしてから再開しましょう」金子さんの全国のスポーツボランティアへのメッセージはそのままアライアンスのモットーであるのかもしれない。

5. 市民で作るボランティア活動 ～ S V 2 0 0 4 (宮城)

<誕生の経緯と目的>

スポーツボランティアの頭文字をとってS V、2004年に誕生したとしてS V 2 0 0 4。名前の付け方はきわめてシンプルですが、名前だけでは活動内容はわかりにくい組織かもしれません。最大の特徴は特定のスポーツ種目ではなく、地域の中で多様なスポーツをボランティアとしてサポートする市民有志の集まりという点でしょう。そのミッションは次のようになっています。「スポーツをより楽しくコーディネートし、ネットワークを通じて環境改善に取り組むことでスポーツの振興と、スポーツに関わる人々の社会的認知を高めることに貢献します」、これをもう少しわかりやすく項目としてまとめると下記のようになります。

私たちはスポーツのボランティア活動は「楽しく」あるべきだと思います。

そのため、ボランティアと運営組織、ボランティア同士のコミュニケーションを大切にします。

思いをともにする人々とのネットワークを構築します。

活動するボランティア環境の改善、そしてエコ活動にも取り組みます。

サポートするイベント・組織が継続しよりよいものになるようサポートします。

スポーツボランティアの活動が多くの人に理解され知ってもらえるよう活動します。

会員の内訳をみるとS V 2 0 0 4 (以下、S V) が誕生した当初は2001年の宮城国体や2002年のワールドカップ宮城大会でのボランティア経験者、既に1998年から活動していたJリーグのベガルタ仙台のボランティアなどサッカーを中心としたメンバーが多かったのですが、現在はその後誕生したプロバスケットボールやプロ野球で活動するボランティアも入会し、年齢や考え方にも変化がうまれつつあります。

<現在までの活動 依頼による活動の事例>

S Vの今、そして発足以来の活動を振り返ると「時代の流れ」というものとの不思議な縁を感じます。S V誕生からの主なボランティア活動は下記の通りです。

<2004年>

- ・ 仙台国際ユースサッカー大会サポート (仙台市スポーツ振興事業団)
- ・ ラグビートップリーグゲームサポート (宮城県ラグビー協会)

<2005年>

東北楽天ゴールデンイーグルスボランティア発足 (楽天野球団)

仙台89ERSボランティア発足 (仙台スポーツリンク)

- ・ サッカー日本代表戦サポート (日本サッカー協会)
- ・ 泉ヶ岳アウトドア・フェスティバル・ボランティア (仙台市スポーツ振興事業団)

<2006年>

- ・ 世界バスケットボール選手権大会サポート (日本バスケットボール協会)

< 2008年 >

女子ソフトボール日本代表戦サポート (日本ソフトボール協会)

(注) 印のものは現在もサポート継続

最初に紹介する活動は文字通りのスポーツボランティアとしての活動です。発足以前のさまざまな会員の持つ人のつながりがあり、2004年については仙台市内の多くのスポーツ施設を管理しスポーツのイベントの主催も行っている「仙台市スポーツ振興事業団」から、当時仙台スタジアムでワールドカップの仙台でのイタリアキャンプを記念し2003年から開催されていた「国際ユースサッカー大会」のボランティア募集の依頼がありました。また、ほぼ同時期に県のラグビー協会からトップリーグのゲームにおいて初めて市民からボランティアを募集したいと相談を受けたのです。このふたつの活動では、事前の募集・備品準備・活動の決まりごとの確定・活動マニュアル作りから、当日の運営、終了後の改善に関する反省会まで一貫して関わることができたことや、会場内にSV2004のカウンターを設置し会員募集や活動紹介ができたことなど、本当に貴重な経験を積むことができました。その実績があったからでしょうか、2004年の11月には相次いで仙台を拠点とするプロスポーツである「東北楽天ゴールデンイーグルス」と「仙台89ERS」からボランティア組織の新設についての相談をうけ、共に2005年の誕生に関わることができました。こうした継続的なプロスポーツのボランティア活動のサポートや、単発で開催されるイベントのサポートでは、ボランティア組織の立ち上げと同様に募集・活動内容の検討・説明会の開催・活動の改善提案・各種企画の開催などを主催団体と連携して行っており、私たちの活動の核となっています。

< 現在までの活動 提案と連携による活動の事例 >

組織の発足以来ミッションの実現のためにスポーツイベントのサポートと共に「3つのアップ」に取り組んできました。

(1) クリーンアップ … 快適な観戦環境を作るためエコ活動に取り組みます

具体的には「環境」をテーマとした活動です。スポーツの観戦は娯楽の要素が強く多くの場合飲食も伴います、ですから観客数が増えることに比例してごみの量も増加する傾向があります。そこで、可能な限りごみの量を減らしリサイクルを推進しエコを考える場としたい、何よりきれいな環境で応援してほしいと考え、発足以来、宮城の環境NGO団体や、スポーツイベントの主催組織と連携し「エコステーションの設置」「分別の呼びかけ」「エコ企画の実施」などに取り組んできました。この過程で環境省のチーム・マイナス6%にも登録しています。

(2) マナーアップ … 接客対応をはじめ基礎的な知識習得のため研修を企画します。

スポーツのボランティアをしている中で、最低限身につけたい知識や技術を私たちの組織のメンバーはもちろん、ネットワークを形成しているボランティア組織の仲間で希望

する人と共に「研修」という方法で学んでいます。現在までに「救命」「災害」「接客」「環境」については実践も交えてセミナーを開催しています。また、回数は少ないものの「フリートーク・フェスタ」という名称で「スポーツとまちづくり」「スポーツボランティアの今後」といったテーマで、様々な立場の方々のトークイベントを企画してきました。こうした研修企画の報告は、ホームページを通じて発信し、あわせてボランティアハンドブックにまとめています。

(3) コミュニケーションアップ・・・さまざまな交流を通じてネットワークを作ります。

ボランティア活動の「楽しみ」のひとつに仲間との交流があります。この本でも紹介しているように全国には多くのスポーツボランティアが活動しており、活動の内容が類似していることからちょっとしたきっかけで一緒になると、悩みを語りその改善方法について昔からの友人のように活発な情報交換が始まります。個人の接点が組織同士のものとなり毎年交流を続けている組織もあります。

< 現在までの活動 自主的な交流活動の事例 >

スポーツボランティアはたとえ種目が違ったり、支援するチームが違って活動の内容はきわめて近いものです。ですから、課題の解決や成功事例の共有のために互いのイベントに体験的に参加したり、メール上での情報交換が日常的に行われています。SV2004では、特に近県の新潟や山形と積極的に交流し、「東北スポーツボランティアサミット」を持ち回りで毎年開催しているほか、横断的な「スポーツボランティア・メーリングリスト」(2010年5月末現在16地域40名参加)を創設しています。あわせて求めに応じて各地のボランティア研修会などに参加するなどしています。

6 . 多種目・多地域をカバーするスポーツボランティアNPO組織

～ 「うつくしまスポーツルーターズ」

「前例がないので苦労することがあります」、約1時間、設立の経緯からさまざまな活動、現状や今後の課題などについて話す中で「うつくしまスポーツルーターズ」の事務局を担当する斎藤さんから何度もでた言葉です。

いただいたパンフレットによれば、「ルーターズ」とは「熱烈に応援する人々」、「ささえる人々」の意味を持つ英語であり、「うつくしまスポーツルーターズ」(以下、ルーターズ)は、自らスポーツを楽しむとともに、福島県のような様々なスポーツシーンをささえる「スポーツボランティア」の基地(ベース)となるべく、2005年春に誕生しました、とあります。さらにその原点は2004年9月に開催された「スポーツマスターズ全国大会」で活動した1,300人にもものぼるボランティアの中の有志が、組織をぜひ残したいと考えたことにあるということでした。多くの人の協力があり発足した「スポーツルーターズ」、活動のスタート段階では福島県の広域スポーツセンター内に事務所をおき、活動資金をはじめとするサポートを受けられたとで、「ボランティア活動を依頼する組織・団体とルーターズとの関係作りがスムーズにすすんだことが大きかった」と斎藤さんはいいます。

福島県は総面積約14,000km²、北海道・岩手に次ぐ広さを持ち、中核となる都市だけでも県庁所在地の福島のほか、中央に郡山市、太平洋側にいわき市、そして西側に会津若松市があります。このため県内各地で開催されるスポーツイベントのサポートのためには、必然的に県内各地にボランティア登録者を増やす必要があります。2007年4月、従来の行政からの支援に依存するのではなく、「会費」・「事業」・「助成金」などをバランス良く収入を確保するためにNPO法人として自立することをめざし、事務所を移転するとともに、法人格取得の準備に入り11月に法人格を取得したのです。この結果、ボランティアとして活動する活動会員は年会費として2千円を収めることになったのです。こうした変化にともない、2006年1月末で433名いた登録者のうち会員として会費を納入した人が約150名、約60名が退会、残り約200名は活動希望するときに会費を支払う登録会員という状況に現在ではなっています。これまでも「実質的活動者」だった150名の会員はより活発に活動に参加しており、会費徴収による大きなマイナスはないということですが、活動の幅を広げるためにもさらなる会員を増やす努力は続けられています。(注)活動会員のほかに、年1万円を納め運営に直接関わる運営会員、年2千円の会費で活動に賛同し支援する賛助会員があります。

具体的なスポーツボランティアの活動をみると2006年度では年間約30のイベントに、延べ562名が参加しています。特徴的なものをあげると、Lリーグのマリーゼのホ

ームゲームのサポート（6試合）に110名が参加、人気が高かったという「リゾートトラストレディスゴルフ」に100名が参加、他にプロ野球、ウォークラリー、ワールドカップスキーなど種目も開催地も本当に様々です。「最初はかなりの時間をかけて事務局スタッフもでかけていましたが、現在はリーダークラスの経験豊富な方が各地に育ったので楽になりました」と斎藤さんは笑います。イベントがかわれれば活動内容も変わります。もぎりや案内、準備や撤去作業のてつだいもあれば、給水や計測を依頼されることもあるそうです。それも、活動を始めたころに多かった駐車場を含めての警備的なものから、何年か活動する中で信頼関係を作れたことでより重要な活動を任せつつあるというのです。こうした変化はボランティアの待遇面にもおきています。事務局では依頼団体に対し特にボランティアの待遇について注文をつけることはほとんどないといいます。ですから、イベントによっては交通費を支給されることもあれば何もないこともありますし、弁当すらでないイベントもあるということでした。募集の段階で条件・待遇を明示していますのでそれでもやりたいという人が集まるのだそうです。例えば弁当が出なくても一生懸命にルーターズのユニフォームを着て活動する姿に感謝し、翌年には弁当が支給されることになったこともあるといいます。「頼まれなくても慣れているので率先して手伝い、結果としてルーターズの評判がアップしていること、それが何よりうれしい」という言葉に、活動の歴史を感じました。

ルーターズの活動の中には、会員向けの研修・講座もあります。2006年では県内4ヶ所での「スポーツボランティア基礎講座」に124名が参加したほか、生涯スポーツコンベンションに200名など6つのイベントに453名が参加しています。今後もこうしたボランティアの育成、ボランティアスキルの強化を重要視していて、そのために「ボランティアのハンドブック」を作成するとのことでしたし定期的に研修会を開催する予定ということでした。また冬にはボランティアをまとめ主催者との橋渡しを行う「ボランティア・リーダー」のための「リーダー研修会」の開催が決定しています。リーダーが順調に育つことは、活動の基盤となる将来の支部作りに向けてもきわめて大事なことなのです。こうした活動については、NSVA（日本スポーツボランティアアソシエーション）との関係も大きな支えとなっているようです。

そのほかの今後の課題や取組みの中では、「地域のイベントなどにルーターズとしてブースを出すなどして、認知を高めることで仲間を増やしたい。」ということでした。頂いた季刊で発行されている「うつくしまスポーツルーターズかわら版」の最新版の中にも「会員増キャンペーン中」として、会員から活動の楽しさを伝えるメッセージを募集したり、いきなり会員になるのは、という人のための「お試し活動」への参加者募集の記事が掲載されていました。また、スポーツ団体だけでなくさまざまなイベントのボランティア向け研

修の運営や講師派遣などを積極的に受託し、組織としての知名度や信頼性を高めることにも取り組むということでした。

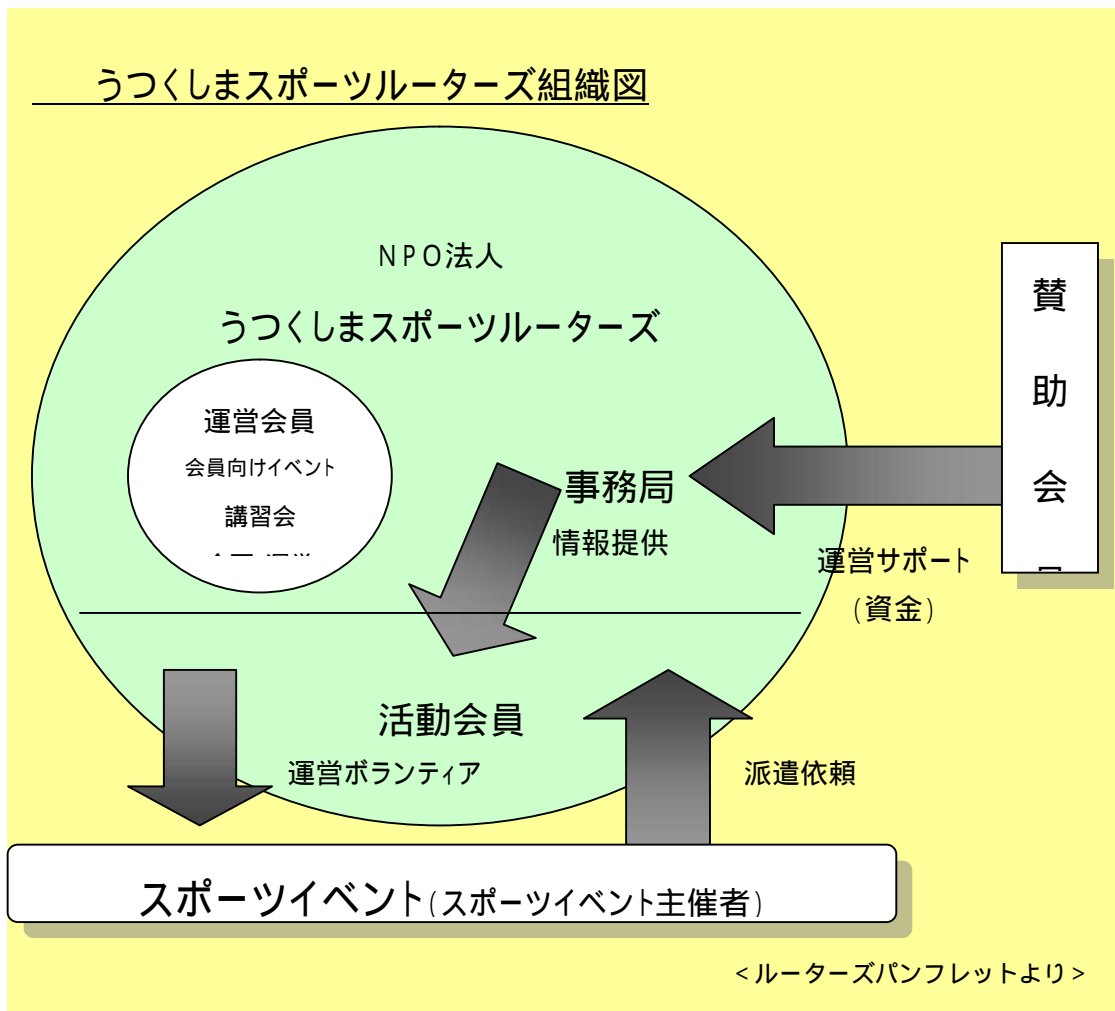
通常スポーツのボランティア組織は運営する組織と一対一の関係です。これに対し、多地域で多種目のサポートをすることは関係する多くの団体やスポーツ行政組織、各種会員などとのネットワークの維持、拡大が何より大切になり、そのための事務局としての仕事は気の休まる暇もないはずで、「大変ですね」という問いかけに斉藤さんは笑いながら「前例がないので」という冒頭の言葉を繰り返し、だからこそ日々新しいことに取り組んでいるという「楽しさ」を感じている、とのことでした。プロスポーツがないからこそ、現在のスポーツボランティアの形が生まれた。それも確かに説得力があります、しかし、この形でやろうという人々の「思い」、それが無ければ今はありません。昨年から法人格を取得して自立の道を歩き始めた「ルーターズ」の今後が楽しみです。

うつくしまスポーツルーターズ・ホームページ <http://www.rooters.jp>

(関連) 日本スポーツボランティア・アソシエーション・ホームページ

<http://www.nsva.or.jp>

うつくしまスポーツルーターズ組織図



<ルーターズパンフレットより>

終わりに ~ 思いの数だけの「楽しさ」

それが時代、と言ってしまえばそれだけのことでしょうが、環境や福祉などさまざまなテーマと同じようにスポーツもまた、一人ひとりの市民の果たすべき役割が大きくなってきていると感じます。環境・福祉・コミュニケーションなど一見無関係と思われる活動にも「健康」というものが大切なキーワードとして関わっています。その意味では「見る」スポーツの隆盛を追いかける形で、健康志向型の「する」スポーツがひろがり、同時に「見る」と「する」をつなぐ形で「ささえる」スポーツともいえるボランティア活動に参加する人も増えているように思います。「好きだからささえたい」などきっかけはいろいろであり、様々なボランティア活動の中では誰でもが気軽に参加しやすい分野といえます。私自身も最初は「みる」というポジションから地域のサッカークラブを無くしたくない、ということで活動を始めました。早いものでそれからもう12年ほどになりました。

多くの場合スポーツのボランティアは組織として活動しています。一般的に組織の運営をする人々からは決まった活動を決まった通りに行うことが最も評価されがちです。一方、ボランティアは経験も性格も違う一人の人間であり、活動していく中で自然にネットワークも生まれ、自ら考え改善したり、より楽しく活動したいという欲求が生まれます。スタンダードと創意工夫、個人と組織のバランスの中でどのように認め良いものを伸ばしていくのか、ある程度上下関係がはっきりしている企業などとは違った運営の難しさがそこにあるのです。

私自身正直に言えば、この瞬間も含めてこの12年間、何十回となく活動を止めたいと思ってきました。慣れない活動の中でやり方のまずさや誤解から対立が生まれたり、方向性の違いから活動から抜けていく人を見るにつけ、自分の力の無さをいつも感じてきました。いっそのことボランティアの活動を始める前のように、家族や友人とチケットを購入して好きなチームを応援しゲームを楽しむ、それでもいいのではないかと考えたときもありました。けれど、止めようというぎりぎりの瞬間、このスポーツ全体を包み込む大きな変革期にあって、仲間とともにその場に立ち会えることの幸せを思い、ことスポーツのボランティアという活動に限定しては、つたないながら経験し作り上げてきたことを、どんな形であれ伝え残すことで、これから活動を始めようという人々や組織にとって、たとえ反面教師としてであっても役にたつことができないかと思うのです。

多くの人たちと同様に、これだけの分量の文章を書くということは初めてであり、書けば書くほど思いとズレていくような不安の中で、なんとかペンを置く時を迎えようとしています。「楽しい」からボランティアを続けている、これまで出会ったたくさんの仲間からいつも感じ聞く言葉です。こうした出会いの楽しさ、これからを一緒に考え作っていく楽しさ、こうして今を記録することの楽しさ、スポーツがあり、人がいてこそ「楽しさ」は生まれます。願わくばその「楽しさ」を見失わないでほしい、心からそう思います。